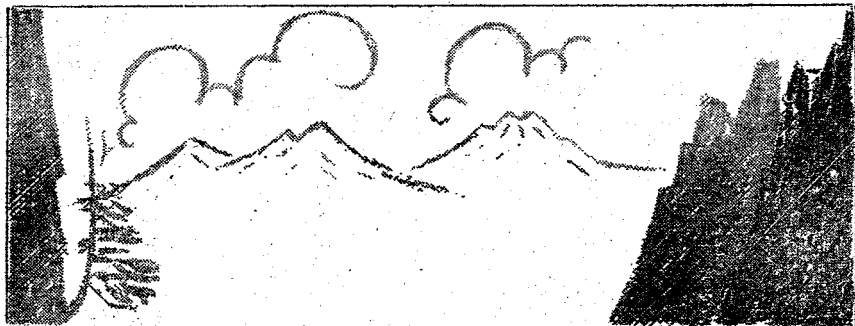

時報

No. 6

1954.6

大阪大学山岳会





時報 第六号 目次

一、夫ははれに登山技術……………	篠田軍治	(2)
一、極地法の運営について……………	尾藤昭二	(4)
一、冬山報告……………	天狗のゴルより檜へ(極地法)	(5)
一、春山報告……………	春の黒部へ……………	(27)
一、装備……………	ナイロソソントについて……………	(33)
一、山行記……………	寄附報告……………	(35)
一、集会記……………	録……………	(35)
一、会員名簿……………	録……………	(47)

○巻頭写真

天狗のゴルC.Iにて

一九五四年一月一日 川島勇 撮

失われた登山技術

篠田軍治

物理学の実験をやるのには硝子鍍工と写真が必要だということには学生時代に耳にしたことが出来る位に聞かされた言葉である。併し、今と違ってみるに写真とは相違らずであるが、硝子鍍工の方は事情が一変した。昔の物理学者の中には硝子細工が言いたために、よい研究ができた人もあり、化学者の中でも登山家としても有名なラムゼーの多数の稀薄瓦斯の発見の秘には優れた硝子細工の技術があつたことも亦有名である。所が、今では眞鍮装置にも硝子をあまり使わなくなつた。それと同時に硝子細工の練習もあまり必要でなくなり、その技術は半ば失われてきた感がある。

これと同じようなことが登山技術にも確かにある。道を間違えずに正しく歩くこと、これは登山技術の初めであつて、終りであるとも言われており、事實道を間違えるといふことは常に致命的な結果を招くことが確かであつた。今でもルートを見付けることが登山に最も必要なことには変わりはないが、岩登りの技術が落達して大抵の所は通れるようになつてきたので少々道を間違えた位では別に遭難の原因にはならなくなつて来た。そんなつてくると道に対する感覚も確かに鈍くなる。道の新旧、峠の上に通じる古道か、それとも木樵の道か、こんなことを判断する能力が確かに不足して来た。この程度ならまだよいが鋸目を見付ける能力の不足、沢から崖根への取付点を間違えたりするようでは困る。夏山の合宿中の行動は兎も角として、寒しがるべき合宿解散後の山歩きが台無しになつてしまふようなことがないとも限らない。

二つしたことには案外無關心になつたことには發痛の進歩、それに伴うビヴァック法の進歩も与つて力があるようだ。

以前は天候の悪化した時の不時の露宿は惨めなものだった。防寒具は不完全だったし、寝みの焚火は中々燃えつかない。飢と寒さに惨澹たる一夜を送るのは決して有難いものではなかった。こんな時に猟師ならば簡単に火を起すが学校山岳部の部員はこの点では猟師に遠く及ばない。こんな悩みも携帯燃料の発達で大体において解消した感があるが一面、徒らに荷物が層々焚火の技術の低下の原因になつてゐるようだ。

これと同じようなことが徒歩の場合にも言える。谷歩きをして、行き詰まつてから引返して徒歩を見付けて向う側に渡る。暫く行くと又行き詰まつて渡渉する。こんなことを繰り返すのが一番拙劣な谷歩きとされてきた。従つて谷歩きには渡渉点を見出すこと、渡渉の技術は共に重要な技術であつた。

黒部の平の小屋から東沢の出合までの間で自分達が且て二回の徒歩で避けて通つた岩壁を数年前の隊大の隊は直登してゐる。時間はこの方がかゝつたようだが、嘗ての自分達が同じことをやつたらあつと時間がかつてゐるに違いない。岩登り技術の進歩は確かに無用な徒歩の回数を減少させることには大いに貢献してゐるが、昨年度のような未曽有の潜水に出合つて何となく疲労を暴露するようは気がしてほらぬ。あの中央線の不通になつた頃、酒沢合宿中の学校山岳部の中には相当地ゼエテランの揃つていた所でも、橋が落ちたり大変だと大部陥つていたようだ。こんなことも徒歩を豊富に持つた谷歩きに親しんでいないこととこの結果として長雨が続いた時の逃げ道というものに対する感觸が鈍いためではなからうか。

ついでながら述べておきたいことがある。よく山登りの本に徒歩の時には五尺位の丈夫な杖を上流の方につくとかがイルを使うとかいう方法が載つてゐるが、流石が急な深い時は自分にはどちらも一寸出来やうもない。これは自分の技術が下手なためかも知れないが同じように入ぐ他にもあつて差支えはない筈である。邪道かも知れないが、身長よりも遙かに長い杖を下流側に突いて、あまり大きく川下へ流されないように渡ることにしてゐる。

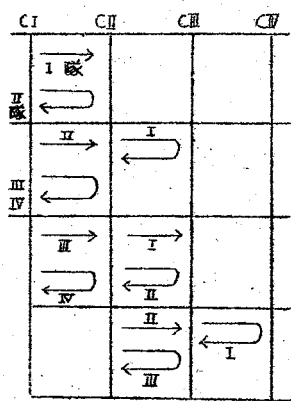
極地法の運営について

尾藤 昭 一

極地法登山は、よく言はれる様に正に人の縦への和によるより、縦断を行動の登山形式である。その、く力の縦への和、といふ事は、一人の単独者乃至一パーティがあるコースを初めから終り迄単独にすべて登山する（登頂は勿論偵察、荷上げ等すべて）のとはなく、そのコースに於て多くの人間が有機化された組織のもとに、各人が各々登山といふ行動の各要素を分ち合ひ、それらの総合に於て一つの登山といふ行動が完成されるといふ意味であらう。従つて其処には、異なる場所で何人かの人間が同時に有機的に行動するといふ事に於て、極地法はあく迄動的状態として思考せられねばならぬ所にむつかしさと複雑さがある。其の滑かな合理性の動きにのみ見事な極地法が完成されるのだ。人体の動きという物は、各要素の極めて巧妙を調和ある有機的動きであるが、それと反射といふ自然現象に負ふ所

大であるが、丁度それと比べて考へられる物は、各メンバーの登山家としてのレベルの高さと計画の熟考にたへて考へられよう。それはむしろ角として、此処では、この複雑な動きの極地法を、そのまゝ、ではなく、凡ゆる客観状態をさりはなして、唯テントを如何にして進めるか、如何にしてポーターを展南するかといふ事に焦点を置いた。

〔他登山隊の極地法行動表を見る事は、一寸うるさい。へ文末各校行動表参照〕 しかし、色々な行動を目で見、読み直つ考へてみる時、(図)に示した行動表の見本こそこれが極地法に於けるテント前進の最も基本的な行動表である事が分る。即ち、一歩々々、偵察を行ひルートを開拓して一歩毎に前進するもので、(図)を説明すると、I隊は常に先へのルート偵察と、フィツクスガイルの工作



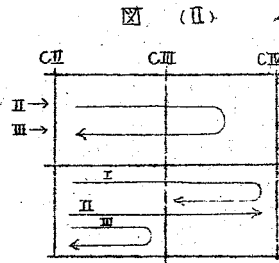
(図 I) I 隊を次から次へに前進せしめ、III 隊、IV 隊はその後を荷上げて行く

のである。中大の明神尾根、明大の冬の北尾根等に、その見事な報告が見られるが、世の記録にも屢々見られる基礎的は物である。此處に於ては、I隊は、常に最少限度の必要物資と共に行動出来る場合のみ、一日の行動日も損失なくスピーデイに前進出来るのであり、一方ボツカは、それに歩調を合せて次から次へと行はれ、且つI隊が欲する物を、I隊が欲する時に、I隊の居る場所へ新上げが出来てゐなければならぬ。この争が円滑に進行するには、ボツカの要領が如何に計算に基いたものであるかを物語り、又何時如何なる時も、此の動的状態を速続風雪で何日も停止しても、その儘の状態を各テントル持ちこたへ得る最低食糧（この最低といふ所にボツカ量の合理性、ひいては計画全体のスピードが射録してくる）が何時も備へられて居らねばならず、且つそれに十分な装備と種々の高度な技術が要求される事は、如何に周到な計画と準備が必要であるかを物語つてゐる。つまりI隊は、ルート所拓者としてテント前進ポトラ展開のカであり、後のボツカは、すべてI隊を支へてポトラ展開への基礎となるもので、お互の衝車がびつたり合つて滑かに何回も回転して行く事により、幾つかのテントが進め

られて行くのである。

所が一方、別な方面から見ると、ポトラ展開の全体を初めから終りまで先述の様もあり方、即ち連続の回転といふ言葉で現はされる——同一の動きの型が繰り返されて進められる——法で考へてゆくよりも、寧ろもつと重層的、集中的な展開法が考へられる。それは、最後の2ヶのテントを出す事は、荷物も少く可成容易であるから、例へば、天幕を四ヶ所に設けるとした時、CIを實際にACとして具体化し、前半と後半に分つ物である。CIは、ベースを前へ進めるといふ意味で、CIへのボツカに全員で当り、全荷、全メンバーがCIに揃ふ迄はテントを進めず、唯その先の偵察、ザイル工作の奴を行ひ、CIにそれらの集結と同時に一氣にCI、CIを設けて、アタック態勢を完了しようとするものである。これのよい例は、一九五二年十二月の巨大の岳川より北穂へのポトラに認められる。即ちCIは、全員ボツカに六日間を要してCIに集まり、後一氣に全員でCI、CIを二日間展開して態勢を整へた。此の最後の2ヶのテントの展開は、(I)より(II)乃至(III)の様は方法で、或は日大がやつた様に地形のよく分つてゐる場合は、全然偵察なしで行ふと一日

大の行動表参照一巻二二頁、又は二日と行動日を短縮する事が出来て、而もCII及びの爆發的エネルギーの使用により一気に展開をやり、その勢で攻喜もやらうとするものである



だから、前の考へ方と、後のそれは決して横に並ぶ様な対立的な物とはなくして重ねるべき性質の考へ方である。具体的は細い基礎的計画は、前の考へ方により飽く迄綿密に周到に進め(例へば図I)

Ⅳ、Ⅲを適当に組合し、その運営に當つては所謂後者のABCの考へ方による能率的な展開が望まれよう。

それからアタック隊の最前キマンパへの入り方であるが、これは図Ⅳ乃至Ⅴの形式が多の場合見られるもので、明大の冬の北尾根中大の明神極地法、日大の岳川生活、日大の真又↓槍ポラー

—この争は、先述の二つの考へ意識するじしむいと拘らず、ある意味でこの考への元にポラーが展開されてゐる争を物語るであらう。所がABCの考へ方が、何処も、縦へのポラー展開上に於ける意味においては少い様に思へる。唯地形的にか、又縦への攻喜以外の派生攻喜の爲にのみ考へられらる様に思はれる。へ早大の横尾尾根極地法に於ける天狗池ゴルのCII—此処から派生的に槍往復—、日大の真又↓槍に於ける前麓上のCII—此処から明神三峯往復—など)

又、ポラーの原則としては、アタック隊を出来る限り遅延しておき、最前キマンパ完成と共にアタック隊がスーと後から出て来て、そのキマンパに入らうとする考へは、實際問題として殆んど不可能であり(早大の横尾尾根ポラーに於て強く反省してゐる)又そこ迄考へる必要はないだらう。

又アタック隊が入る日に、次の行動日の攻喜の一部でも偵察を行ふておく事は、その攻喜を成功に導く大きな要素であり、巨つ日数節約、スピーディといふ點で極めて有意義である。所が図Ⅳ、Ⅴは、アタック隊は二ヶ手前のテントから最前キマンパに入るが、やはり一ヶ手前のテントから入り、サポート隊最前キマンパを建設せしめて、その間に偵察を行ひたいもので

ある。こうなると再び他の行動全体から考へて行かねばならぬ
い尚趣である。

要するにポーター展開に於ける色々な考へ方、隊の動き方に
於て、その源動力は二に「工作隊」の如何に依つてゐる。烈派
上の工隊が工作隊に相当するのである。普通の極地法登山に
於ても、これに類するパーティは任るが、これを意識に上らせ
て工作隊と名付け、見争にポーター展開の推進力として工作隊
のポーターに於ける意味を確立したのは一九五〇年一二月の明
大の北尾根極地法である。彼等の工作隊は、ぐいぐいとテント
を進めて行き、寧ろボツカ隊の方をたたくせしめ、同年三月
に早大が北尾根ポーターで前穂頂上にテントを出せられたの
を厳冬季、見争にその頂上にCIを設けたのであつた。だから工
作隊は、アタック隊と共に極地法登山の核心をなすものであり
それを意識するのとはしないのは極地法展開と大いに意味が
あるだろう。

私達は、今冬上高地をBHとし天狗コルにCI、奥穂頂上CII、北
穂頂上にCIIIを設け槍往復を行った。この極地法に於て特にその
ヌピードといふ尖に主眼点を置いた。即ち殆んど意識化してゐ
る岳沢のBCを設けずに天狗コルのCIをABCとして、一五名でCII

CIII全荷を一気に二日間て天狗コルに上げ、稜線上メンバー入
名が入り、此処にCIIに全メンバー、全荷が集結したのであつた。
勿論残部の者は、ボツカのみで下山した訳だ。その連続二日間
の間に、既にロバの耳迄のザイル工作が完成してしたのである。
BCを設け直かつた等、ボツカのみのメンバーを集めた事は、か
くもCII(ABC)をヌピーデイに完成せしめた要因であり、又一面
明大の特色を生かした点でもあつた。CIIに集結した状態で二日
間連続して停滞せしめられた。更にCII、CIIIへは二日間て態勢を
どこのへる予定の所、小さい不都合等と、急病人が出た事で、
その下山の為人手をとられたが、それでも連続晴寒三日間を与
へられて、その期間内にCIIIを一気に設けて態勢を整へたのであ
つた。これは、図(1)(2)(3)の形式をその儘では無いが、適当に組
み合ひ、其処へABCへの集結後を一気に展開するといふ運営法を
見事加味出来たと云へよう。

(二)ポーター展開の主動力は、工作隊である事は、何處も述べた
事だが、一方ボツカ作業はその基礎としてゆるがせに出来ない
簡車の一方の輪である。此の事について、これの取取り上げて
今更述べる必要もないが、その中心尖の取取り上げよう。
これは計算、荷造り、荷分け、荷上げとして現れる。この初め

の三者計算、荷造り、荷分けは所謂準備として完璧の域迄努力すべしは勿論であるが、特に、荷分けはボツカを確実に、行ふ第一の基礎であらう。我々は今冬、荷分けの不鮮時を、一ヶ所、二ヶ所、三ヶ所をなめたのだつた。明瞭な荷分けなくして、とても山での正確なボツカは望めないのである。今一つはボツカは唯単に荷を上げる事ではなくして、必要な物を荷上げするといふ事である。つまり荷上げの順番が生命であつて、明日必要な物が明後日必要な荷よりおくられたりしては何もならない。明日上では何が必要だから、今日荷上げするには、何を第一に、何を第二に、……と、常に正確な荷上げの順位をつけて、正確にボツカを行ふ為には、是非共、全計画に熟慮した責任者が絶対に必要である。多くの場合チーフリーダーが後部に在り、兼ねてこの任にあつてゐる。

(三)我々が極地法登山に於て、今回スピーデーは展開し、向山を主眼に取扱つたが、今一つ考へねばならない事は、そのテント間隔とアタックの問題であらう。テント間隔を一杯に広くしたアタックも、逃げる様な即ち改善した日に、Cは撤収する様なものではなくして寧ろラッシュエタックテイクの様なアタックを組み、同一の規模でより広範囲な行動を展開する事が出来よ

う。更にアタックがその儘決定に移れば、益々面白くなって来る。要するに、極地法に於けるスピードも、単なる時間短縮ではなくして、行動範囲をより拡大する、といふ事に意味があるのである。

稜筋に於ける極地法登山を調べたが、見落しもあるだらうが大體次の様なものである。

〇一九三七年一月(慶志)西穂↓奥穂

善六沢上部にBCを設け、Cを天狗岩頂上に設けて奥穂往復、

〇一九四二年三月(早大)横尾尾根↓奥穂

BCを横尾岩小舎、Cを北穂直下に設けて奥穂往復及び天狗池

コルのCより槍往復。

〇一九四七年三月(早大)北尾根

北尾根末端より五、六コルにCを設けて前穂アタック

〇一九四七年一月(明大)層岩尾根↓奥穂

〇一九五〇年三月(早大)北尾根末端より北穂

BCを横尾岩小舎、北尾根末端より取付き、Cを三、四コルに

設けて北穂アタック。

〇一九五〇年一月(早大)明神主稜↓奥穂

岳沢下部にBCを設け、Cを前穂頂上に設けて奥穂往復。

○一九五〇年十二月（明大）北尾根より奥穂。

麓を尾根コルにBCを設け、前穂頂上にCIを設けて奥穂。

○一九五〇年十二月（日大）北鎌尾根↓北穂

天と沢上部にBC、CIを南岳に設けて北穂アタック。

○一九五一年三月（早大）天狗コル↓北穂瀧谷

岳沢上部にBC、CIを瀧沢槍直下に設けて滝谷アタック。

○一九五一年十二月（日大）奥又白↓槍

奥又の池CI、前穂にCIIを設け、前穂東壁完登後、奥穂CI

北穂CIを設けて槍往復。

○一九五二年十二月（日大）岳沢生活

BCを岳沢に設け、向岳に上りロバ耳奥穂側にCIを設けて

北穂往復。

○一九五二年十二月（慶大）北尾根

尚、参考として日大（2）、早大、明大、中大各校の極地旅行
動表を掲載した。

— 参考 文献 省略 —



北尾根 → 北穂

1950.3 早大

横尾岩小舎

屏風ノ頭

峯下

4.5コル

3.4コル

北穂

BC

CI

CI

CI

CI

	BC	CI	CI	CI	CI	
III 2 晴	14					CI 債
3 "	4	←	II III			
	6	←				
4 "	15	←				
5 "	12	←	III			CI 建
		←	II			
6 曇		←	III			CI 3ヶ債
7 雨		停	停			
8 曇	I, IV	←	II III			II III 物干
9 "		←	I, IV, V, III			
10 晴		←	II III			CI 建
		←	III			
11 吹雪	V 停		III IV 停	II 停		
12 "	"		"	"		
13 "	"		"	"		
14 瓦雪		V	III	II		
		←	I, IV, IV			
15 "		I, IV	←	II, III		CI にホノカサ II III IV
		←	II, III			
16 晴瓦		I, V	←	II		
		←	II, IV			
17 晴				II III		
			I V IV	←		
18 曇雪			I	←		
			IV, V	←		
19 瓦雪			IV, V	I II III		
20 "			"	"		
21 "			"	"		
22 "			"	"		
23 晴			IV	I, II, III		前木にCVを 作る事にする
			V	←		
24 晴				←		CV 建失敗
				←		
25 晴雪						CI 4.00 前木 6.50 真木 8.55 小舎 9.50 北木 13.30
26 曇雪				I		
27 晴				←		CI III 前木 真木 小舎
				V		
28 "				←		

明神主稜 → 奥穂

1950. 12 中大

西木部沢木場
B.C

C.I

長南峯直下

C.II

RIPZエル

C.III

C.IV

奥木

日	西木部沢木場 (B.C)	長南峯直下 (C.I)	RIPZエル (C.III)	奥木 (C.IV)	備考
XII/16	II I III IV V				IIボウカ復行ル
17	II I III IV V				
18					
19	全				C.I建II隊入る
20	I III IV V	II			
21 吹雪	III IV I	II			最南峯迄5本f/x (160m) I → C.I IIIボウカ
22 晴	III IV	II I			
23	IV	I III	II R3P2エル		C.II (I, II 隊) IIはC.Iへ逆ボウカ
24	IV	III	I, II		C.III用ボウカ (II)
25		III IV	II I		
26		IV	I, III	II	
27			"	"	
28		III IV	II I		
29		III	I II		奥木頂上1130 出巻不明
30	III IV		I, II		

北尾根 → 奥穂

1950.12 明大

KI尾根 RP2 コ P.8下
BC CI

5,6コル CII
34コル上 CIII

前ホ CIV

奥ホ

XII	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	I	2	3
吹雪	→																
曇	← 5 →																5名CIへ横ボツカ (不能)
晴	← 5 → 6																
1/4雪	← 6 → 4																
晴	← 3 → 1																CI隊4名P6起 ボツカ紛. 200m
晴	← 5 → 2 ← 5																CIIの3名はP.5の ガイル工作
吹雪	← 5 → 2																
曇	← 5 → 3																P.4迄ガイル工作
吹雪	← 5																BC 隊ボツカ
"	← 3 → 2																
晴	不明																
"																	
吹雪	← 5																
"																	
"																	
吹雪	← 5																
"																	
"																	
晴																	
吹雪	←																
"	←																
"	←																
晴																	
吹雪	←																

奥双白 → 槍

1951.12 日大

徳天 C.I.A 奥双白 A双白 前木 吊籠器 奥木 北木 倉岳

日	天候	徳天	C.I.A	奥双白	A双白	前木	吊籠器	奥木	北木	倉岳
9	晴	←	←	3候						C.I. 送リル工作
10	快晴	←	←	6.2 往復						C.I. 建
11	雪	←	←	6.2 往復						
12	快晴	←	←	3候						C.II 送復
13	晴 層雲	←	←	4.2 往復						C.II 建 P3-R ガル工作
14	瓦雪	←	←	4.2 往復	停					
15	"	←	←	停						
16	"	←	←							C.I. アタリに達ス
17	吹雪	←	←							
18	晴后 瓦雪	←	←	2 (北へ)	2 (A721)	2 (P3-R)				前木 東へ 集中登ル
19	曇 后 晴	←	←	5 候						C.III 復ケツ
20	晴	←	←				I II III 候 IV			C.III 建
21	"	←	←				V II III I IV	I 候		C.IV 候建 北へ候
22	瓦雪	←	←		停	停	停			
23	"	←	←		"	"	"			
24	雪晴	←	←		"	"	III	I 候		
25	曇 吹雪	←	←				II III	I		槍 } 成功 蹴神 }
26	瓦雪	←	←		停	停	停			
27	吹雪	←	←		"	"	"			
28	瓦雪	←	←				II III IV V	I		C.IV, C.III 撤収
29	曇 晴	←	←	3 3.2 往				4		
30	快晴	←	←				3 7 2			C.II 撤収
31	雪雨	←	←				12			C.I 撤収
I /	晴	←	←				12			

岳川生活

1952. 12 日大

上高地 B.H 岳川 B.C 前ノ岳 C.I 天狗ノコル C.II 四ノ耳 C.III 北木

日	天候	上高地	岳川	前ノ岳	天狗ノコル	四ノ耳	北木	
XII 12	晴		11				B.C 建設 (カマボコ)	
13	晴	1	7	2	偵察			
14	晴			7				
15	曇雨		8	4	新人トレーニング 西木狩沢 → 西木ダカ岳 天狗沢 → 天狗岩			
16	雪			12			B.C 撤収 全員 CIに入る	
17	曇時晴			12				
18	晴			9	1	2		
19	晴 曇 風雪			2	3	2		
20	風雪			停	停	2		
21	〃			〃	〃	停		
22	〃			〃	〃	〃		
23	〃			5	2	2	2	C.III (6, 40) 北木 (10, 30) C.III (14, 20)
24	ガス				3	7	2	C.III, II 撤収
25	風雪			8	4			CI一部撤収 B.C 再建設
26	晴			4	西木	4		西木登頂后 CI 撤収

第一次の計画終了し 翌27日より第二次の計画に入る。

冬山報告

冬の穂高

山本光 二

昭和二十八年の春、数年未の夢であつた後立山樺道に成功した我々は、積雪期に於ける次の目標を何処にしようかというところに就いて少なからず迷つて来た。唯暗が理解して来たのは、春の夜縁上での行動がさしたる支障もなく行われ得る様になつた今、次は冬の國境稜線こそ念の進むべき当然の方向だということだ、我々の後立山までの諸々の成果は一度は他の場所では確かめられなければならぬといふことであつた。極端に云えば後立を除いた冬の稜線であれば何処でもよいといつた愚考をもつてゐる者さえいた。しかしながら我々の休暇は限られ、おりの天候の悪い奴や、アプローチの長い北岳で長期間稜線を生活し得るとは思われなかつた。結局、遠山川の軌道を利用してさる阿アルプスの南端と穂高とが対象として残り、種々議論が盡されたが、何れとも決りかねた。冬の目標が未決定の儘に、夏山まで宿は急ぎ行われたが、その頃から未だ見ぬ冬の穂高の國境稜線

が次第に強い魅力をもつて仲間向に意識され始め、先輩の中にも、今こそ幾多の山岳団体の記録のある穂高で、阪大山岳会の実力を試す絶好の機会だといふわかれた人もあつて、秋山を前にして、冬の目標は穂高にすべく決定をみた。

ルートは最初西穂から北穂が考へられたが、西穂から奥穂迄計画しているとところが三枚もある様子なので、天狗のゴルから槍往復に決められた。但し天狗のゴルは天幕を設置し得る場所が少いので、此処に他のパーテイの天幕が二つ以上ある場合には、明神殿南峰より北穂を第一計画とすることにし、その決定は専ら北穂隊の偵察結果によることとした。

先にも述べた如く、種々の学部より成る我々のパーテイは時向的に非常に制限を受けており、我々の行動可能な期間は正月の前後に約二週間あるのみであつた。この様な状況の下にあつて、天狗のゴルより槍往復という、かなりの長大な計画を実行するには、ある種のスピードを必要とした。それは、最先端をマンプを出発した利那に、ポーター・システムから完全なランシュ・タクテイックに移行し得る程大きな攻撃力をもつたアタク隊を、如何にして最もスピーディに北穂頂上まで前進せしめるかという課題との対決を意味した。このため我々は、一方

でナイロンテントの購入や入ミリの細引の使用による裝備の輕
量化をはかると共に、他方先發隊のデポと、ガポート隊の活用
によつて岳沢には何ら中継キヤンプを設けず、天狗のコレまで
の荷上げを全費一日十三時間の行動という一種のラッシュユによ
り一挙に解決せんとした。かくしてポーターシステムでもなく
ラッシュユ・タクティックばかりとも云えない、一種奇妙な計画
は次第にその形をととのえて来た。

最後に尚題となるのは、現役の中で應高に経験のある者が極
めて僅かしかないことで、アタック隊の川島、尾藤ですら北
穂から槍の向は夏も通つたことがない程であり、一時は夏山を
穂高にするべきだつたし後悔した位であつた。しかし他面、我
々の大部分にとつて未知の場所、しかも冬の稜線といふことは
大きな魅力でもあつた。そして、それだけに文献は一層の熱心
で輸送され、秋の三度にはたる偵察の後、大体ルートに就い
ての成算を得たときは美に嬉しく期待で胸がふくらんだ。

○メソバ

C Ⅲ隊

アタック 川島 勇 (C.L.) 尾藤 昭二 (S.L.)

ガポート 木村 裕

C Ⅱ隊

山本 光二 (L) 記録) 土居 直

C Ⅰ隊

東 雅 (L) 穴戸 元 (食糧) 空中 勝 (裝備)

ガポート隊

住吉 仙也、広橋 茂、抱忠 男、林 伸一、山本 進一郎

○行動概況

十二月廿二日 先發隊山本、土居、木村、抱大阪発

廿三日 (曇時々雪) 先發隊中の湯泊

廿四日 (晴) 帝國ホテル木村氏宅に入り裝備の点検。釜トン

ネルの上からスキーをばいた。

廿五日 (高曇) 先發隊はホテルで天狗のコレには現在、學習

院パーティーのみしか天幕を設けていないことを聞き、計画は

第一案に決定、以後はボツカに専念することにし、天狗沢出

合より少し上標高二三〇〇米附近に荷物をデポする。(デポ王

本隊の川島、尾藤、住吉、東、穴戸、広橋、空中、林、山本

(進) 大阪出發。

廿六日(風雪) 先發隊は前日と同じ場所まで荷上げ。本隊は
沢渡泊。

廿七日(快晴) 先發隊は今日こそ天狗のコルに達しようと思
つたが、前日の降雪のため天狗沢のラッセルは駒返もあり、
遂に午后四時あきらめて、天狗沢を左候と分れてから少し登
つた左側の尾根の末端附近にテポする。(デポⅡ)

本隊は帝國ホテルに入る。

廿八日(小雪) 土屋、木村をテントの整備と飯炊に残し、他
は全員で天狗のコルに荷上げし、C工設置後川島、住吉、を
残してホテルに下る。二の日尾嶽、東はラッセルのため一同
より一時尙早く午前五時先行したが、デポⅡ附近で浮習院パ
ーティが下山されるのに遭ひラッセルは大いに助かった。尚
デポⅡに於けるちよつとした手違いのため、本来のC工用テ
ントをテポに残してしまつたので、C工には止むなくC工用
のナイロントを張つたが、このことは後に計画を實質的
に二日遅らせるに至つた痛恨の失着であつた。

廿九日(高曇) 川島、住吉は口バの且ままでのガイル、フイツ
クスを先行し、世は林、抱を除き全員残余荷物的一切と共に再
び天狗のコルに至り、四人用テント一張を増設して、午后四

時CⅢ・CⅡ・C工の各隊はC工に入り、住吉、玄橋、山本
(進)は夕崗迄る天狗沢を下つて行つた。

廿日(風雪) 停滯

廿一日(風雪) 停滯 午後五時気温急下せ八度。

昭和廿九年一月一日(快晴) 凄しい風の音にだまされて天候判
断を誤り出発が遅れる。八時半、川島、山本は先行し午後三
時興癒小屋までのフイツクスを完了する。尾嶽、奥戸、空中
はテントの張替及荷物の整理を先行し、東、土屋、木村は興癒
頂上のCⅡ建設予定地にボツカしたが、ボツカ隊がスコップ
を上上げるのを忘れたため、CⅡ用のプロックを予め切つてお
くことゝおとぎなくなつた。第二の失着であり後にCⅡがつぶ
される原因はこの辺にもひそんでいた。この日は一日中、春
と面違ふ様な寒にのどかほ快晴であつた。

二日(晴后風雪) 七時頃朝食中に東が右腹の痛みを訴える。
言陽炎らしいのでペニシリソを注射し、グロロマイセチン
を服用させ、奥戸、空中をつけて下山せしめる。ところが全
く幸運なことに、このとき太田敬代と共に徳永、大島両先輩
が天狗沢を登つて来られ、外科医たる徳永先輩は天狗沢の途
中で直ちに東を診察された結果、東は正しく言陽炎であるこ

が難しかった。一同少なからずがっかりしたが、東のことは
目で引受けようという大島先輩の確言を耳難く聞き安心して
十時半出発する。奥穂に着き(十二時)尾藤・木村はフイツ
グスのための酒沢槍の下りまで行き(午後三時)残る三人でC
IIを建設する。CII設営場所は始め奥穂頂上の前穂側の予定
であったが、岳川側よりの風が強い上に雪量が少くマプロッ
クが切れないので、テントが危朽していることも考えて奥穂
小屋側へ少し下った處、登高丸号にある廢座の方がかつて高
所露営研究のためにテントを張られたという位置に変更した。
吹雪が烈しくテント設営はかなり困難であったが、午後五時
には完成し、フイツグスに行った二人も帰り漸く落着くこと
ができた。

尚、東とこれに同行した徳永先輩及び兵戸、空中はホテル
に泊り、太田氏と大島先輩は奥穂まで我々と同行された後、
酒沢へ下られた。

三日(快晴) CIIは設営位置が悪く起きて見ると奥の三人は
動けない程埋められていた。堀出しや荷物の整理に手間どり
十時出発する。CIIIへのボツカは一人約四貫、午後三時半北
穂頂上に着く。山本、土屋は直ちに引返し、六時CIIに帰着

CIIIは北穂北峰頂上に快的に設営された。遂に攻勢態勢はど
どのつた訳である。

一方、東には徳永先輩が同行して沢渡へ下り、大島先輩、
兵戸、空中は中の湯附近までこれに同行し上高地に泊る。

四日(風雪) CIII・CIIは停滞。兵戸、空中は大島先輩及び
太田氏と共に天狗沢を登り、二日朝以来、んどあつたCII
を再建設して太田、大島両氏と別れてこれに入る。

この頃よりCIIの生活條件は次第に悪化しつゝあつた。設
営場所が吹き溜りの處にあるたのいくら除雪しても四方から
さら／＼と隙隙なく雪が降り落ちるさき、三十分足らずでもと
通りになつた。おまけにCIII建設后持ち帰つてCIIに置くは
ずの大シマベルをCIIで日没に迫られたためキマンパ完成前
に帰途についたので持つて帰れず、十能の様な小シマベルで
は除雪の能率はほとんど向題にはならなかつた。さらにもつと
悪いことにはラデウスが三日朝以来調子悪く、よく見るとハ
ンダが破れ其処からガソリンが吹き出していた。

五日(晴後風雪) CIII隊川島、尾藤は槍アタックに成功した
CIIIには食糧が四日分しかなかつた。従つて三日目にアタッ
クをするということはその次の日には是が非でも撤収しなけ

北ばならないことになり、斯様な膏險は許されないから、二日目の二の日前天にめぐまれたのは全く幸運であつた。

C 丑(六、二〇)——南岳(二一、〇〇)——脊の小屋(二、四〇)——大槍登頂(二、〇〇)——南岳(五、〇〇)

——横尾本谷北壁直下(七、〇〇)

(以下アタック隊川島の手記による)

「尾藤も私も北穂から槍迄の稜線を一度も歩いたことがなかつたので明くなるまで待つてC 丑を出発した。スレットへの下りは昨日の新雪がふわりと乗つていてコンディションはよくなかつた。北穂小屋すぐ下のルンゼで突然板状雪崩が落ちし私の足許からかなり大きな雪板が音もなく滑り落ちこつた。少し下つてからアンガイルン、信州側を絡み下ら下降を続けた。北壁はどこにあるのだろうか。我々は文献によつて北壁中のルンゼを下りれば横尾本谷に出られることを知つていた。どれがそのルンゼだろうか。突然絶壁の上に出た。眼下には広いカールが見え、対岸には南岳が聳えていた。そしてその遙か向うには、我々が望んで止まない大槍が穂先を覗かせていた。

目的のルンゼは一眼で分つた。針金を伝い、岩峯を巻いて

ルンゼ詰のコルに出ようとしたとき、尾藤が軽い叫び声を上げた。ピツケルのシマフトが折れたのである。この儘アタックを続行すべきか、引返すべきかに暫く迷つた。引返せば、もはや再びアタックするだけの余力は我々にはなかつた。

「行こな」

彼の決然たる声で、我々は又前進を始めた。ルンゼを真一文字に駆け下り、カールの底でガイルを解く。昨日の新雪で膝を没するラツセルである。ワカンはC 工から先へは全然上げてなかつた。それで南岳から一つ手前のピークへのリッデを直登し、こゝから稜線を辿つた。南岳の登りも恐ろしく悪い筈である。南岳からは広い稜線を中岳、大喰岳と廻々ラツセルレ作らぬ快適に突走り、登過ぎ槍岳の肩の小屋に着いた。大槍登頂は午後二時であつた。

少し前から天候は悪化し始めていたので、大急ぎで帰途についたが、大喰岳にかゝる頃から風雪になつた。中岳の下りでは下り口が分らず少し迷つた。南岳手前のピーク辺りより風雪は烈しくなり、ルートを失ふことが屢々で、全く磁石とカンだけが頼りであつた。漸く南岳肩のコルに着いたときは既に夕闇が迫つていた。ルンゼを真一文字に下つてカールの

窓に出た。腰袋のラツセルである。日は全く、霧れ風雪は一瞬に表えない。岩陰で小燈の後會灯を頼りにCⅡを強行しようとして北壁のルンゼに向つたが、往きにはなかつた岩場にぶつかつて前進困難となつた。諦めて少し引返し、岩を背にフェルトを破つてビヴァクする。小型のプリムスがあつたので、まづまづ快的なビヴァクであつた。(手記中断)

アタック隊が苦斗を続けているとき、CⅡでは、はるかに陰気な生活が始まつていた。吹き溜りの窓に埋もれて昼でもロソクをとるさねはなほない程暗いのは前日と変らなないがラデウスの調子はいよいよ悪くなり、使用中はまるごとピストンの如くポンプを押さねはならず、テロジンの不完全燃焼による悪意はテントに充滿した。カバートのない土屋のシユラフはバリバリ凍り、腹の冷えた彼は腹稱を訴え出した。無理もない。CⅡではこの日から湯も飲めないようになつていた。昼過ぎCⅡの奥戸、本中が連絡に来たが、CⅡには彼等の湯を煮すだけの水すらなかつた。

六日(風雪後晴) アタック隊CⅡに帰着する。(アタック隊川島の手記続き)「完全に眠るくなくなるのを待つて入時ツェルトから外に出る。未だ雪は止まらぬが世形の判断は出来た。

我々は北壁の真下、左寄りにビヴァクしていた。昨夜の岩場は北壁左端の岩稜だつたわけである。腹迄のラツセルに苦しみつつ往路のルンゼを登る。稜線に出た途端に物凄い風雪に迎えられた。漸くの思いでCⅡに降りついたときには、二人共指先を軽い凍傷にやられていた。(十一時)(手記終り)

CⅡでは夜が明けると、薄明りの中に殆んど身動きも出来ないでいるお互いの姿を見出した。ロソクをつけ、カチカチのフランスパンをかじりながら相談する。昨日の晴天にアタックが行われたことは間違いない。その成否はとにかく、CⅡの残余食糧より考えて次の晴天には撤収が行われるのは確実である。だからなんとかこのテントであと二日程生活し得ないだろうかと思ひめぐらした。ラデウスは殆んど使用不能になつてゐる。その上ラデウスの故障のため、意外に多くのロソク、マッチを費したので、ロソクは一本、マッチは十五本足らずになつてゐることを知つた。こゝに至り漸く奥穂小屋への避難を真剣に考え始めた。今CⅡを抛棄することとは、ポーターシステムの完全な破綻を意味する。しかしそれは安全性の限界を越えて行動する理由になるだろうか。二時間近くも考えたが、遂にCⅡ抛棄を決定し、シユラフ、食

糧等の必要品を持つて物凄しい風雪の中を奥穂小屋に入った。

○Ⅰ隊に停滞。

七日(風雪)

○Ⅱ、○Ⅰ隊共に停滞。○Ⅲ隊は我々の計画はざりくゝのもので○Ⅲには食糧の余裕が余すところ一日分しかないことを考え、昼頃薄日が差して来たのに力を得て、独力で○Ⅲの敵収を行つた。(十三時半出発) 気温低く何もかもベリベリに凍つていて、かなりの重荷であつた。溜沢橋にかゝる傾斜に予想に反して再び亂雪は烈しくなり、溜沢岳の登りではフィックスが深く雪に埋まり、ピッケルで掘り出すのに半時間ちかゝつた。顔面は吹きつける雪に凍りつき、悪寒力も凍結したかの様に、前へ進むことだけが頭にあつた。最後のフィックス二本は拋棄し、漸く溜沢岳に立つことができた。ニンニク燻灯を出し、何度モルートを誤りつゝ辛うじて穂高小屋に辿り着いた。(午後六時半) そして、其処で彼らは始めて○Ⅱの破綻を知つたのである。それでも人数が五人に増すと少し陽気になつた。木村だけは、指先をかかり強い凍傷にやられ、「痛い痛い」と云いながら指を湯につけていた。

八日(快晴) 快晴だが風は強く気温も低い。○Ⅲ隊員は○Ⅱ

敵収を今日にすべきだつたと後悔したが、昨日のアルバイトのおかげで今日は一部上高地まで敵収しようということにする。十時、川崎、山本は前日残して来た溜沢岳のフィックスを取りに行く。その間に、残る三名は、折から登つて来た○Ⅰ隊の二名と共に雪に埋もれた○Ⅱを敵収し、午後一時半○Ⅰに向つて出発した。皆荷が重いので、悪場ではかなり緊張させられた。川崎、山本は最後尾からフィックスを敵収しながら来たので知らなかつたが、ジヤン、ダルムのトラウアーで土屋が頭に落石を受け危く滑落しそうになるといふ全くぞつとする様な場面もあつた。フィックスが細引三米程とピトン一本を残して、他は完全に敵収されたのは四時半、その頃、先頭はすでに○Ⅰに着いたが、○Ⅰ敵収に時間が遅すぎるので、土屋、実戸、木村は上高地に下り、他は○Ⅰに泊つた。一同やれやれといつた気分だつた。

九日(曇) 天気は悪いが、いやに暖い。荷物が大きく四つに分け、各人がそれを引きずつたり転がしたりしながら天狗沢を下る。岳沢には上高地から三人が迎へに来ていた。

十日(雨) 装備の乾燥がすんだのは益。春山の計画に必要はため全装備を七人が背負うと一人宛十二貫程にもなつた。午後

二時雨の中ぞと喜地を出発、双差までと想つたが、中の湯に
来たときは眞暗であつた。

中の湯に着くとすこ湯に染び込んだ。湯の中で歌をうたい
ながら今度の山行を回想した。今冬の計画は文字通りざりざ
りのもので、そのためか反省すると杖拳に暇のない程失敗が
あつた。しかしに驚きごとという点では過去に飯大山岳会が行
つた如何なる計画も及ばない程のものだつたらう。それだけ
に不完全な面もあつたが、これをどはかくマリ終うせたのだ
全く嬉しいことだつた。こつして湯に入つてゐる今ごさえ、
向道は山積してゐる。第一明日は一人背り十二貫の荷を淺沢
まで下さなければならぬし、卒業試験は迫つてゐる。先輩
は勿論、そこら中に借金がある。だがそれにも拘らず自分も
含めて、皆によくやつたと拍子ごもしてやりたい様なほのぼ
のとした気持ち湯の香と共にお互の向にたちこめていた。

一終一

ザイル・ファイックスに就いて

何處も述べた様に、今回はスピードある行動といふことに特
に力が注がれた。しかしこれとて安全性の限界を越えることの

できないのは云うまでもない。そこでザイル・ファイックスは充
分にし、しかもそれを要するザイルの重量により行動の敏捷性
を缺かしめなうために八耗のザイルを思い切つて用いた。唯強
度の点より考え、トラヴァース以外の場所では十二耗のものを
用いた。従つて全長三百メートルを越えるファイックスを行つた
にもかゝわらず、ザイルが重荷になつたり、つかまつてゐる
ザイルの強度が気に懸るという様なことはなかつた。以下フイ
ックス箇所を羅列する。

ジマン・ブルムのトラヴァースへ八耗（四十米）

ロバの耳の下降へ十二耗（四十米）

ロバの耳のトラヴァースへ八耗（四十米）

フラート・ツルムへの登りへ八耗（三十米）

ロバの背へ五耗を二重にし二十米

興徳から小屋への下降へ八耗（四十米）

酒沢岳の下降へ八耗（四十米）、十二耗（三十米）

酒沢槍の下降へ十二耗（四十米）

北穂南峰の下降へ五耗（二十米）

尚、比較的安全度の高いところでは補助的に五耗のものを、
傾斜の緩い上下にはトラヴァースでなくとも八耗のものを使

用したことを附言する。

食糧

C工建設までの食糧とその後の稼働上のものをとはつきり區別した。前者は普通の平地食と何ら変わらないものであつたが、後者はあらゆる兵で野量化、簡便化が計られた。

主役では米を一切廃し、フランスパン、揚げパン、食パン、即席モチの四種類を用いた。即席モチは初めての大量使用で最初の中は喜ばれたが、時日が経つにつれて、醤油、マナ粉等の調味料を持ち合わせなかつたので次第に堪えられ、結局のところはトーストパンが一番愛用された。これは市販のサストスターをラヂウスにのせて作るもので、今やこの小な道真は我々には行くてはならぬものとなつた。その他に興味あるのは、CⅡ隊の木村が上高地から二つそり米を五合程持つて行つたが、これがCⅢで正に天下の美食となつたことで、昨在春も感じたことだが我々の嗜好には米とは殆んど離れ難くございゑるから、重量の点で問題にならぬ位の量を一種の食慾のための娛樂として携行するのも有利な方法であらう。

副食では、味噌、醤油を感じ、野菜を全体で約五百枚程度の

乾燥ネギに限つた。

斯様な食糧の野量化は、一応成功はしたけれども、質的方面では欠陥を露呈した。換言すれば我々の嗜好とバランスが取れなかつたのである。ことに副食の簡素化は調理可能な料理の種類を限定し、遂には主食に於ける食慾にまで影響を与えた。これは食糧二に副食の計画がドロナワ式に行われた結果と考えられる。食糧計画の樹立にあつては必ずパーテイ内部に於ける各人の異なる嗜好に妥協を見出し、おかなければならぬことは言をまたない。しかるに今回の計画は立案より実行に移すまでの間が短かつたせいもあつてこれが行われなかつた。したがつて山に運ばれた食糧は、食糧係が独善的に自己の嗜好によつて購つて来たものばかりということになり、いやごもそれを食べなければならぬ様になつてから不満の声が挙る様になる。しかもこれは食糧係だけの責任ではない。どうも阪大山岳会には食糧に關しては「あなたまかせ」の悪癖がある様と思われてならない。昨年の後立山縦走の報告の末尾に食糧計画は我々の反省の焦点とあるという二ことが書かれた。ところが一年経つた今、又も同じ苦白をせざるを得ないのはなんとないか。ないことだらうか。諸兄の再考、再々考を希うや切なるものが

ある。

食糧 糧 総 量
①、稼線用食糧

主 食

- 即 席 餅 三六箱（一箱五五〇瓦入）
- 食 パン 四二斤
- フランスパン 一四四ヶ
- フライパン 二〇四ヶ
- ビスケット 一貫一〇〇匁

副 食

- 乾 ネ ズ 一貫メ
- 肉（牛肉） 六ポンド
- マーガリン 一、五ポンド
- チーズ 四ヶ
- マーマレード 一五ヶ
- スープ 素 三五〇匁
- 味 噌 二ヶ
- カレー粉 六袋
- 脱脂粉乳 五ポンド
- 工、ア 四合
- 塩 糖 八斤
- 砂

②、上高地日、H用食糧

主 食

- 米 二斗八升
- フライパン 一〇四ヶ
- ビスケット 七〇〇匁

副 食

- 王 ネ ズ 二貫
- シヤガイモ 二貫
- 味 噌 一貫
- 醬 油 五合
- イワシ缶詰 二ダース
- ズン次ら油 一缶
- サケ 四
- カレ 三
- カタレ 三
- バタ 三
- 其の他 二ポンド

テント別食糧

行動表より各テントの行動日の食糧を算出した。

- C1..... 八四食
- C2..... 二七食
- C3..... 一八食

あとがき

今回の計画は大きく三段階に分つて出来た。第一段階は天狗のゴルに〇工を建設するまで、次は攻勢態勢完了まで、最後の段階はアタックの撤収である。第一段階は突突隊の行動が予定より手前どつた他は、一応支障なく完了することが出来た。ところが、第一段階から第二段階に移ろうとしたとき、〇工隊のリーダーたる東が言場炎を起し、第二段階の展開に必要な二名の隊員がその対策のため計画から除外され、計画自体大きな障害に行き当つた様に思つた。ところが幸運にも先輩、しかも外科医を含めたメンバーが登つてこれに、二名を除いた五名の隊員は全く後顧のうれいなく、折からめくまれた二日続きの晴天を利用して第二段の攻勢態勢完了に力を集中することが出来た。かくして第三段階は成つたが、その成功の中には〇工の建設位置が悪いという失敗の因子を含んでいた。そしてこれが、アタック隊が横尾谷のカール、ボーデンでヒヴァクしている頃頭をもたげ始めていた。続く〇工の抛棄と、〇工隊の天候を誤認しての撤収により、五名が奥穂小屋に入る事態に陥り、アタックの成功を別としてボーラー・システムとしては致命的な破綻を見た。しかし、続く快晴で事故なく撤収を完了出来たのは

幸であつた。

斯様に幾多の挫折を齎しながらも、とにかく、総往復に成功し得たのは、隊員各自の登攀能力もさることながら、〇工達の幸運な出現と、正月に続く例年になく好天気によるところが非常に大きいと思われる。このことは、我々の培い未つた強い神経は忒々にして粗雑な神経と誤解され勝ちであり、弱い神経を厭つことは、精緻な精神まで失われしめるのを示している様に考えられる。この点こそは会の今後にとつて大いに反省すべきことであり、次の機会こそは、我々の持つてゐる強い神経に悔なき山行を求める精緻な精神を加え、より一層力強い抜きのない登山を行いたいものである。



行 動 表

	上高地	天狗丸 CI	奥水 CII	北水 CIII	倉
12月 25日	高雪 ← 4	← 4			本隊大阪発
26日	高雪 ← 4	← 4			
27日	晴 ← 予備				本隊上高地入
28日	小雪 7 ← 2	← 2	← 2		※逆バレルフィックス
29日	高雪 6 ← 2 3	← 2	← 2		CI 建 全蔵全荷 CI=集結
30日	高雪 停	← 2			
31日	高雪 停	← 2			
1月 1日	晴	← 2 ← 3	← 2 ← 3		奥水小倉マテ バレルフィックス
2日	晴後高雪 3 1名高倉収=テヲ名 上高地=下ル	← 3	← 2 ← 3		酒沢より下リマテ バレルフィックス CII 建 5名入ル
3日	晴		← 3 ← 2		CIII 建 3名入ル
4日	高雪 ← 2 DB他1名	← 2	← 2 停	← 3 停	CI 再建 蔵本谷のルボテン
5日	晴後高雪	← 2 (連絡)	← 2	← 2	アタック隊 ビザアーク
6日	高雪 後晴	← 2	← 2	← 2	アタック成功 CII テント撤棄
7日	高雪	← 2	← 3 ← 2		CIII 撤収
8日	快晴 ← 2 ← 1	← 2 ← 1 ← 1	← 2 ← 1 ← 1		CII 撤収 2名酒沢迄 バレル撤収
9日	雪 ← 4 ← 3				CI 撤収

春山報告

春の黒部へ

尾藤 昭二

昨年の春の後立縦走の時、連日の峻線上生活の合間合間に眺めた内藏助平や黒部に實際感ひ込まれる様子を感じてゐたがそれが記憶といふ箱に入れられ、意識といふ箱に乗せられて又ると、冬の穂高に迄足をのびして再び後立に郷愁を感しつゝある私達を一言の文句もなしに、黒部へ、後立を越えて黒部へ——と引つぱつて行つた。勿論、黒部へといへば、直ちに私達の胸裏に浮ぶあの岩小屋沢岳から西北に伸びる岩小屋沢岳支脈は、昨春私達が崩した新越尾根と共に、既に記憶といふ箱に深くさまつけられた内藏助平と結び付いて、私達の進む方向に太い一本の黒線として、私達をひきつけて行つた。其意には何のまざり気もなく直ちに今春は大沢小屋に入らう、そして新越尾根を登り岩小屋沢岳のあの尾根を下り、黒部へ近附こうと春山に向つたのであつた。

所が計画、準備の不備の爲、黒部の河原に立つ事も出来ず、僅かに木の向から遙か下方に黒部を眺めたに過ぎなかつた。しかし、私達の今回の偵察の要点を詳細に報告し、その基礎の上に若干の考察をなして今後の指針への参考ともなればと思ひ、夏の黒部下廻下さへ知らない私筆を持つた次第である。

● 偵察隊行動概況（春山合宿に關しては、山行記録 参照の事）

春山合宿は、参加者の都合によりA、Bの二パーティに分れA隊は五名に三月十六日から十日間、B隊は七名で三月二十日より十日間の大沢合宿を行つた。夫々の期間中、A隊は岩小屋沢岳支脈の高度約二一〇〇米附近にACを出したが、準備不足から十分下れず。一方B隊はA隊の偵察隊の結果、岩小屋支脈下降をとり止め、中尾根の途中、高度約一八〇〇米余の処にACを出して新越沢を下降し、僅かにその末端から岩小屋沢岳支脈末端に到達したに過ぎなかつた。

● 中尾根新越沢報告

中尾根（仮称）は岩小屋沢岳南麓のヒトグから新越沢に向つて下り、当沢を右と左の二股に分けてゐる尾根を指してゐる。上から下つてゆくと、初めは何でもない尾根であるが、高度一

八五〇米附近よりは急激に落ち込み、尾根通しは悪く、私達は
図示した如き雪渓を一気に二股を下つてしまつた。私達はこの
雪渓の始まる処にACを設けたのである。此の雪渓は平均四〇度
傾斜が一気に連続し、且つ途中に小滝があり雪崩の危険性もあ
り、その上見透しが出来ない、全くシンドイ処である。私達は
この直上にACを置いた為、帰途、正味二時間余直登しなければ
ならないといふ事が、どんなに前進を妨げたか知れない。所
が一旦二股に下ると、其処は玄々として、真白の波の大きなう
ねりの上に樺の大木が一本二本とたくましく腰をすえてゐる全
く快適の場所なのだ。此処を下ると、尖戸が「尾藤さん、此処
へテントを出せばよかつたですね」と云ふ。一も二もなく、こ
の快適さによふ気持は、何年か前の冬、冷沢で同志社パーテイ
が遭難した大雪崩の記憶に蘇つたも無く消えてしまふ——とい
ふ様な辺りの地形なのだ。此処から一見した所では、鳴沢岳に
上つてゐる石段は、岩小屋沢岳に到る石段より悪そうだ。

次の玄々としてゐるのはほんの僅かで、少し下ると河巾は狭
められ、兩岸共雪崩のテアリの土をトラバースしなければなら
なくなる。而も所々沢の真中に水が顔を出し始める。一方見上
げる兩岸の斜面の雪は、うつつらとして殆んど落ち盡し、融け

た様であるが、尚所々大きな塊として残つてゐるが、今にも
滑り落ちそうに春陽に輝いてゐた。そこからの雪どけの水は次
第に蓄を溜して、トラバースするテアリの雪と、斜面との間に
容赦なく流れ込む。このトラバースは、傾斜が急で、而も雪が
くさり、安定した足場は勿論、ピッケル、アイゼンも効目少く
全くいやな所なのだ。バランスを保ち体を宙に浮かす様に、こ
うなると、あん厩にほしかつた沢の水にも手が出なくなる。か
くして左岸を、右岸をと、二曲点に達すると八米位の滝に出合
つた。此処は、アンザイレンして左岸を行き、二曲点を過ぎて
二曲点を下ると、大ダゲジが目前に現れ、愈々黒部も近い事
と知る。此処から岩小屋沢支脈末端に上る真直の二本の雪渓が
並んで居り、これは主稜線からも眺められたが、新越沢から当
支脈に登降し得る最下端の物であらふと思ふ。テアリは、累々
として上部は雪層も厚く、急傾斜な地面と何のかが、はりも厚
くて今にも割れて崩れそうだ。

二曲点を過ぎると、次は今度は大いニ〇米位の滝に出た。
その先は再び新越沢は右折して見えない。黒部別山を眼前に見
乍ら黒部が見えないのを残念に思つて左岸を行きかけたが、状
態が余りに不安定なので止むべく先述の雪渓を登りへ直登一時

筒余し尾根に上つたのである。高度約一六〇〇米定らす。

此処で初めて黒部を望む事が出来た。

●榛の水平附近に黒部別山沢路口附近を中心とした考察。

私達が木の向から望み得たのは、これら附近のみであった。

榛水平は、又るからに乞々として木も兵々と見られるいふ所だ。冠氏が始めて黒部下廊下唯一の野営地として使用せられた。

その榛木の疎林は、大ダテガビンの斜面にはひ上つてゐる。所が其処より下流に來るに従ひ大ダテガビンの斜面は傾斜を増し岩肌となる。それと共にその黒部の河岸は大きくテアリが横た

はり、上には、今にも落ちそうは雪のプロックが兵々掛つてゐる。その最も危く見えるのは、大ダテガビンピークから黒部へ眞直に落ちてゐる沢の所だらう。何しろ黒部別山大ダテガビンの斜面の雪崩？、雪のプロックの崩壊といふ奴は、何時とはなしにどん／＼と落ちてゐるのだから。冠氏が春の黒部では特に石なだれを注意されてゐるが（尤も冠氏の言はれる。春とは五月く六月を指して尋られる様だが）私も曲型的な雪崩ではなしに、雪の崩壊、それも急傾斜面に残つた雪のプロックが、土砂と共に落ちるのには特別に注意しなければならぬと思ふ。その意味から、当所の通過には可成の緊張が必要であら

う。

それから黒部別山沢路口の少し上手に隣合して大きなスノーブリッジが見られた。恐らく通過可能と思はれる程だ。又別山沢口般は、可成真澄雪渓が続き、上部で右側へ下から見ての岩尾根に取り付きこへ出来れば、登行可能と思はれる。

●若小屋沢岳支脈の黒部下降路についての考察。

私達が立つた若小屋沢岳支脈末端から黒部へは、斜面の途中迄見透し得るも下部は見えない。私達は、上はドーム一七〇〇米位の高度で、積雪期には其処だけ木がなくて眞白のコナの様な高まり——迄行つてみたが、それより北の黒部に面する斜面は、下る気にもならない所で、且此処からは見えぬが、その下部は黒部別山側と共に絶壁をなして、黒部は全く廊下状となつてゐるやうである。それは、ドームから派生してゐる小支尾根の北に當ると思ふ。又我々の立つてゐる尾根の末端が黒部へ落ち込む所は所謂「新越の壁」となつてゐるのだから、冠氏が秋黒部から若小屋沢岳支脈に取り付かれ、又上から下降せられたのはその中町であらう。今一度その着書を開くと「徒歩の少し上流の后立山側に、珍しく川近く迄下つてゐる椎木の茂つた尾根に取付き、アンガイレンし、木をつかみ、全くはふ

い。何はとまれ夏道も十分研究して居く必要があらう。

◎内蔵助平について

此処の雪崩については、唯、眞砂岳尾根及び内蔵助谷からの平の中程にも達せぬ程度の氷見られる位で、梯子段乗越剣も大ダチガピン剣も尚題にならぬ様だ。まばらな疎林こそは、如何にも雪の山奥の平和郷に、親しみ深い魅力を具してゐる。其処に於てこゝへ、かつて昔立教大の内蔵助平生活では、丸山北峯より二五〇米突北下した所、にバースを設けられ慎重に今更ながら尊敬の念を感じる。

◎其の他

望見した所、鳴沢岳から黒部に出る尾根は、黒部直前迄十分下降出来る物である。又鳴沢は、滝連続で有名な鳴沢小沢と異り、その落口附近の黒部に面する岩壁も他より低くなつてゐるそうである。案外こゝいふ所に、ルートがあるのではないかしらと以前考へてゐたのであつたが、実は二年前に、鳴沢落口の右岸で黒部が危立山側により、一六〇〇米高度附近をトラバースして東谷落口に到る道が作られたといふ事を、最近而もこの春山後に知り、全く驚いた次第であつた。夏道が出来る程度であれば、可成容易に下れるだらうから、その場所をへ調べ

ればたやすく鳴沢岳から黒部に到するであらう。私の不勉強な爲、春山をもつと有意義にあらしめ得なかつた事を後悔する気持で一杯である。

最後に、夏の下郡下さへ知らない私が、春のそれの一部を見たのみで、厚顔にも種々の考察をなした事で、だから単なる参考といへるものごしかなし事を特に強調したい。

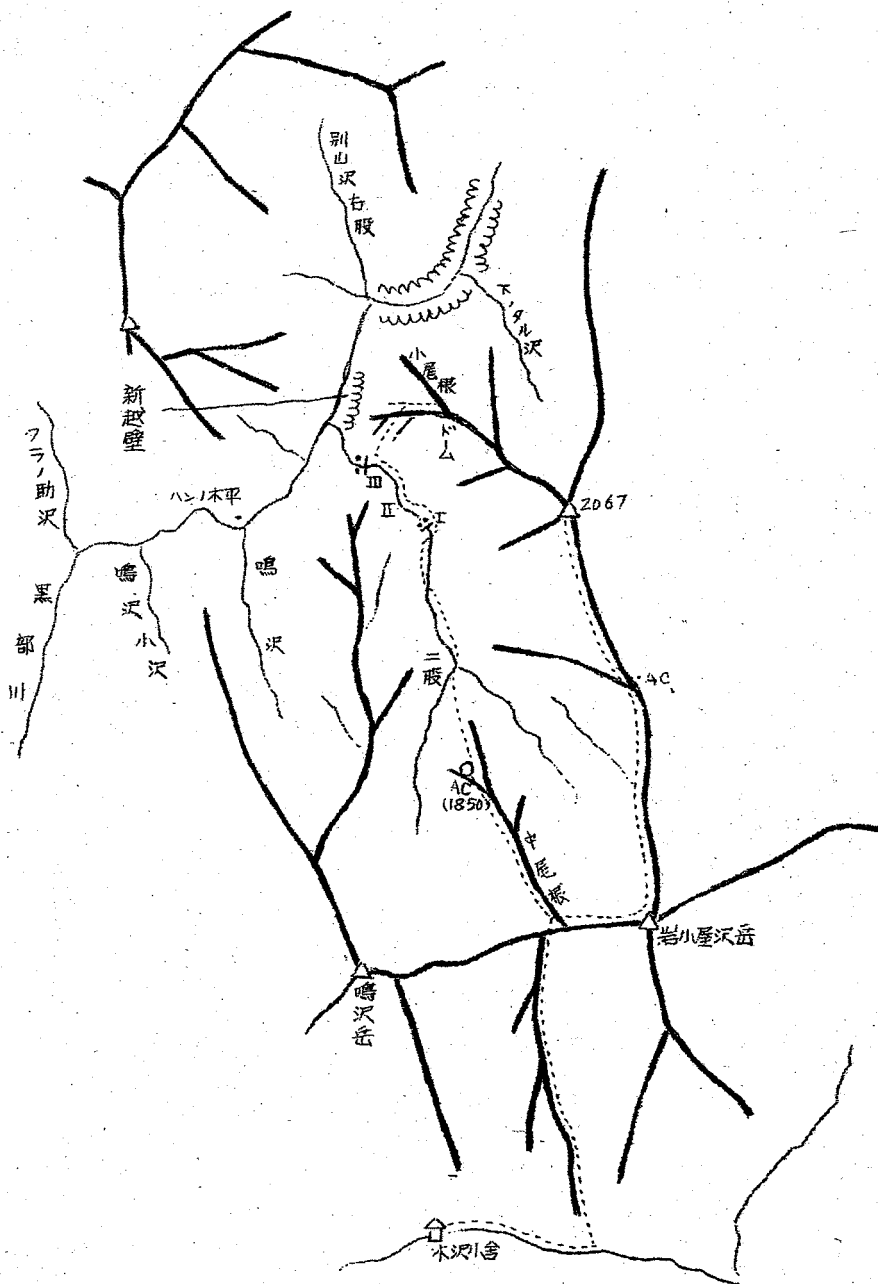
◎裝備について

私達はアイゼンとワカンを使用したのであるが、春の東谷生活や、内蔵助生活された堀田氏は、これらの春山では五尺のスキーが極めて有用である事を述べて居られる。

又高度が低いから雨に対する準備と、一日歩く靴の中がぐすくすになる程ぬれる事は、ぬれる事を知らない被服上生活とは異つた不愉快な事であり、一応留意して居へべき事と思ふ。

◎参考文獻

冠松次郎著「黒部」
立教大山岳部 部報 Ⅲ号 Ⅳ号
関西学生山岳連盟報告 六号



装備報告

ナイロンテントについて

昨今、登山装備はビニロン、ナイロンの導入、経済情勢の好転、登山形式の進歩、加ふるにヒマラヤ遠征等により急速に進歩し、テントに於ても、二三の缺欠はあるが堅韌、番度、耐熱その他の面よりして積雪期高所テントとしてはナイロンテントが常識とされるに至つた。我々の現在使用中のものはすべて戦前のものであり、一昨々年の北岳の経験、又今冬穂高のポトラシを計画するに當つて従来のテントのみでは不可能のため又將來のためにナイロンテントの必要にせまられ、昨年春製作決定、資金面は先輩、部員の御協力による事とした。設計は川島製作は美津濃神保先輩にお願ひし、十二月完成、早速冬山に使用、何分始めての争で色々考へねばならない点もあるが、一応好成績を得たので要矣を報告する。

◇前進マンテ用へ概地用ではない

○形（本号写真参照）

ウイムパー型

寸法 両端三角形 底辺 一、八〇米

斜辺 一、七五米

全長 一、七五米

○重量 軽量化に重量をおいた。

テント 四・三枚 一貫五〇匁

内張 一・〇匁 二六〇匁

支柱 二・五匁 六七〇匁

計 七・八匁 二貫八〇匁

○生地

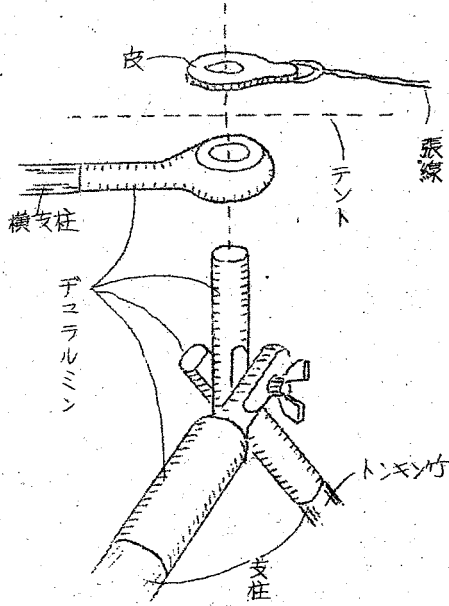
ズマバ織のナイロン製、マナスルのテントに比べるとはるかに厚手のものである。

神保先輩も言はれた事だがもつと薄手のものでも大丈夫だった様に思ふ。

○支柱

交又兵の固定は強度を弱める恐れがあつた故に図の如くネジこしめる事にした。即ち支柱の上端でデュラルミンの棒にテントにつけたそれを合ふハトメに支柱を入れ上に出た棒に張線を固定した皮の板につけられたハトメを動かせる様にした。これはテントを建設する時雨を出来るだけ短くするため

になされた設計である。屋根に入れた横の支柱はテントの型をくずさないのに役立つ。雪がある程度積つても之がフレームの如き役目をした。



○窓

之は始めは作るつもりはなかつたが美津濃の工場との連絡の不備のため底にあげるはずの掃除穴をあけてしまつたので神保先輩の御考慮によりアワリル酸樹脂の板をとりつけた窓とした。之は天狗のゴルゴ天候を見るのに役立つたが、位置が

少し下すぎたため雪に埋るのですぐ役に立たなくなつた。今後この様な窓はもう少し小さく位置を高くする必要があらう。

○張線はこどどく五ミリのナイロンで作つた。ナイロンはすべりが良く、張線にするにゆるみはしないかと思つたが、その横引きはなかつた。

○入口 前進キマンプである先制室等は不用であると考え普通の巾着式と同じにした。ナイロンは全然凍りつかないので巾着は非常に快適で、今ある古いテントも巾着だけでもナイロンにしたらよいと思ふ。

○内張り

内張りを屋根の半分しかつけなかつたのは明かに失敗であつた。

最後に、資金の面で御協力下さつた先輩諸兄並びに直接製作に當つて下さつた神保先輩に深く感謝致します。

中央附立△△△計報止日

收入 医学部 先輩

理学部

工学部

法経学部

部員 積立

計

支出 ナイロソソント(支柱)

ラヂウス 一台

マット(エマー) 2

ポール(三組)

カラビ ナメケ

ピトン 三〇本

フィックスガイル

冬山 援助

交通通信費

計

一一、五〇〇、〇〇

五、九〇〇、〇〇

一五、八〇〇、〇〇

二、〇〇〇、〇〇

九、〇〇〇、〇〇

四四、二〇〇、〇〇

二七、六八〇、〇〇

二、八〇〇、〇〇

三、〇〇〇、〇〇

三、〇〇〇、〇〇

五〇〇、〇〇

一、八〇〇、〇〇

二、七〇〇、〇〇

一、〇〇〇、〇〇

一、七二〇、〇〇

四四、二〇〇、〇〇

(尾藤昭二)

山行記録

一九五三・六〇〜一九五四・六

〇道場(七月二二日)

尾藤也

〇夏山合宿(七月十九日〜二十一日)

川島正、尾藤、山本亮、東、土屋、沢戸、玄橋、李

鷺沢、三枝、山本進、西川

十九日(雨) 地名(二〇、〇〇)一彌陀ヶ原に幕営(二二、〇〇)

二十日(雨) 追分小屋に入る。

二十一日(曇後雨) 別山乗越へ荷上げ

二十二日(雨) 停滞

二十三日(雨)

二十四日(曇一時雨) 追分小屋(八、三〇)一眞砂沢出合にB.C

を設置(一三、三〇)

二十五日(快晴)

ハッ峰上半(川島正、沢戸、鷺沢、山本進)

ハッ峰六峰フェス(山本亮、土屋、李、西川)

源次郎尾根(尾藤、東、玄橋、三枝)

二十六日(晴)

源次郎尾根(山本光三、土屋、空中、西川、穴戸、山本達)

源次郎一峯長次郎劔フチス(川島、醫沢)

ハツ峯上半(尾藤、三枝)

ハツ峯四峯エースより上半(東、立橋)

二十七日(晴) B.Cより三田平(尾藤、東、土屋、穴戸)

二股(川島、三枝、山本達、西川) 三ノ窟(山本光三、立橋、幸

醫沢)にぞれぞれテントを移す。

二十八日(晴午後雨)

東大谷(尾藤、東、土屋、穴戸)

三田平(七、五)一黒岩合コル(八、三)一中、谷出合(三言

一)二股(三、三)一左股より早月尾根(二六、三)一劔岳頂

上(二八、三)一テント(二、三)

劔岳主稜縦走(川島、三枝、山本達、西川)

二股(七、三)一小窟(九、三)一三ノ窟(二、三)

三ノ窟(一、三)一三ノ窟(一六、三)一三ノ窟(一八、三)

池谷右候(山本光三、立橋)

三ノ窟AC(八、三)一劔尾根取付点(九、三)一三候(

一〇、三)一劔頂上(一七、三)一八〇〇一三ノ窟

(三〇、一五)

劔尾根(本中、醫沢)

二十九日(晴夕立)全員二股に集合(一八、三)

三十日 夏山合宿解散

〇立山(七、九)一七、三二) 関本

雨のためペーティと連絡つかず立山、別山の縦走に終つた。

七月十九日(雨) 称名の滝(三、三)一地獄谷(一八、一)

七月二十日(豪雨) 地獄谷(三、三)一越(二、三)

七月二十一日(豪雨) 一ノ越(八、三)一劔沢小屋(二、三)

七月二十二日(豪雨後曇) 劔沢(七、四)一御前(八、二)一

地獄谷(九、五)一復分小屋(二、三)一称名滝(二、四)

一帰阪

〇劔尾高縦走(七月三一日)一八月五日)

東、立橋、穴戸、醫沢、三枝、西川

七月三十一日(晴後曇夕立) 三田平(六、三)一別山乗越(六

四、五)一越(一、三)一越(二、三)一ガラ峠(四

〇〇)一五色(二、五、三)

八月一日(ガス時々雨) 五色(六、三)一スチ頭(九、三)

九、四)一スチ小屋(二、三)一薬師(二、五)

— 乘師平 (一六、〇〇)

八月三日 (晴後曇々立) 乘師平 (六三、〇〇) — 太郎小屋跡

(七、三〇) — 上ノ岳小屋跡 (八三、〇〇) — 黒部五郎岳 (一三、三〇)

く (一三、〇〇) — 黒部五郎部屋跡 (一四、二〇) — 三候連掛岳 (

六、〇〇) — 双六池 (一七、三〇)

八月三日 (晴後曇) 双六池 (九、〇〇) — 槍の脊 (一三、三〇)

— 大橋往復 — 中岳 (一五、〇〇)

八月四日 (曇々立)

中岳 (六〇、〇〇) — 大切ア (八〇、〇〇) — 北徳高 (九四、五〇) — 穂

高小舎 (二四、〇〇) — 横尾小舎 (五、三〇) — 徳沢

(一七、〇〇)

八月五日 (曇) 徳沢 (八〇、〇〇) — 徳本峠 (二、三〇) — 船止 (

三、〇〇) — 島々 (一七、〇〇)

○ 黒部及西鎌鏡走 (七月三十一日) — 八月八日)

川島上、上屋、本中

七月三十一日 (晴後雨) 二股 (八三、〇〇) — 梯子谷出合 (七、

三〇) — 黒部別山稜線 (一三、三〇) — 梯子谷乗越

(一五、三〇) — 内藏助平 (一七、〇〇)

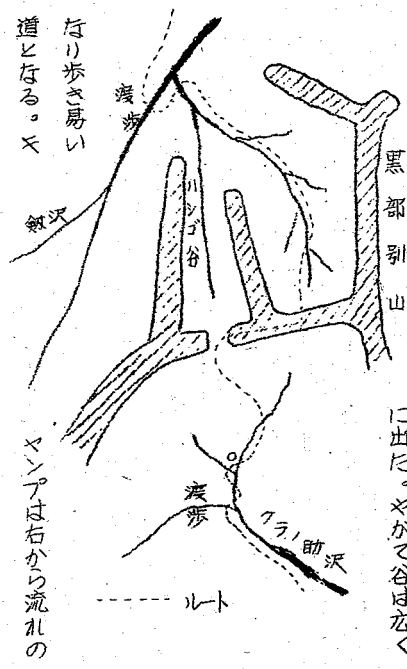
飯沢を渡歩、右岸に沿って少し下り梯子谷出合に出る。梯子

谷は二股を登り切つてツツシユの稜線を梯子谷乗越へ向つて下

る。乗越から内藏助平へは急斜面のツツシユの中に齧跡が落ち

込んでいて、これを下つて行くといふ三分足らずで水の廻れた谷

に出た。やがて谷は広く



はり歩き易い道となる。×

入つてゐる所にする。

— 黒部本流 (一七、〇〇)

午前中は下流へ偵察に出かける。二股までは水量も少ないが本

流になると水量大で明るい。周囲に白樺をまじへた一面の森林

帯である。背は高くないから鬱蒼という感じはしないが、干古

斧鉋を知らぬこの照るい森は青く澄んだ水と相俟つて西欧風な

感じをよく出していた。二股より十米上手で本流を渡渉右岸に出る。右岸を少し下り踏跡というよりは道に近いものが続いているのを確かめて帰る。

午後キマンパを出発して黒部川に向う。内蔵助沢は右岸のブツシユの中を高く捲いて急坂を下つて行つた。出合には左岸に渡る丸木橋と軽重運搬用のロープウェイがある。対岸は五六十米の大絶壁であり赤沢の出合が見られる。

八月二日(曇雨) キマンパ(八八三〇) — 樺木平(九、三〇) — キマンパ(二三三〇) — 御前谷出合(一五、〇〇)

— 御山谷出合(一六、二〇) — キマンパ(一七、〇〇)

ルニツクをつめてから下の廊下へ偵察に出る。はんの木平迄は林の中の平坦な道であり、はんの木平には人夫の小舎があり

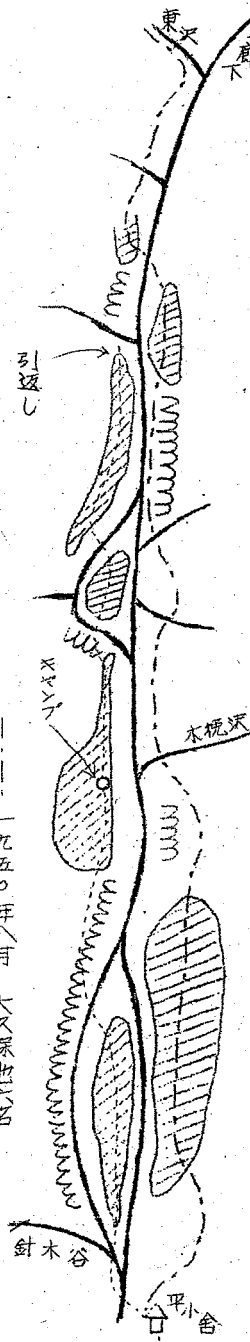
対岸へ測量用の食糧を釣橋があつた。更に下は所々新しい道が古い道を連結していて、大岩壁の途中まア、道もつけられていた。そこから引き返す。

午後は上流に向う。御山谷小舎で小憩の後吊橋を渡つて右岸出、川が大きく彎曲している所でキマンパする。

八月三日(晴) 出発(八八三〇) — 平小舎(九、三〇) — 二、三、三〇 — 木挽沢出合(一四、三〇)

中谷の出合で吊橋を渡つて左岸にうつるとすぐ平の小舎である。

平よりは右岸沿に行く。針木谷を渡つて中州にあがり、之を少し行つてから右岩のガレ場を十米程登るとブツシユの中に入つた。半時間のブツシユ漕ぎの後急斜面を懸垂へ下つて再び畑



—— 一九五〇年八月 大久保也(名)

..... 一九五三年八月 川島他(名)

上に立つ。広い砂地を三十分程行くと木樨沢出合である。こゝにテントを張つて更に上流を一人で偵察に出かけたが、左から大きな支流の入つてゐる所で行き詰り、引き返す。

八月四日(晴) 三人で偵察に出る。昨日の行詰つた所まで行き、サイルを使つて対岸の砂地に渡渉しようとしたが、腰まである激しい流に押流されすぐ引返した。右岸の高松きルート
の偵察もしたが、結局東沢をあきらめて、半日を鮎釣りに費す。

八月五日(曇夕立) 木樨沢出合(七二〇) — 平(八三〇) — 九〇〇) — 南沢出合(一一〇〇) — 南沢東越(一二五〇) — 南沢北峯(一六〇〇)

東沢進行をあきらめて南沢より槍に向ふことにした。

八月六日(曇後雨) 南沢北峯(八六三) — 烏帽子岳(七二〇) — 九〇〇) — 烏帽子小舎(九三〇) — 三岳(一二二五) — 野口五郎岳(一三〇〇) — 三

沢飛越(一五〇〇) — 一五三〇) — 水詰小舎跡(一六一〇) — 鷲羽岳(一七四〇) — 三股蓮華小舎(一八二〇)

八月七日(雨) 三股蓮華(一一三〇) — 双六小舎(一三二五) — 槍着ノ小舎(一七〇〇) — 一八〇〇) — 二ノ股(一九〇〇)

八月八日(晴) 二ノ股(九〇〇) — 徳沢(一二三〇) — 三ノ股(一四〇〇) — 白沢出合(一三四五) — 一四〇〇) — 徳木峠(一五五〇)

一六〇〇) — 粘留(一七三〇) — 烏々(二一三〇)

↓ 帰阪

○ 奥又白(八月八日) — 八月十六日)

山本光三、岡本、田島〇B

八月八日 大発路

八月九日(晴) 上高地(一七〇〇) — 一八〇〇) — 徳沢キマン

チサイド(二〇〇〇)

八月十日(晴) キマンチサイド(二〇〇〇) — 松高ルンゼ

入口(二一三〇〇) — 昼食(二四三〇) — 一五〇〇) — 奥又白池

(一六三〇)

八月十一日(曇後雨) 出発(二〇〇〇) — 本谷雪溪取付(一〇三〇) — 二一三〇) — 四ノ峯コル(二一五〇) — 一三〇〇)

— 奥又白池(一六三〇)

八月十二日(雨) 停滞

八月十三日(雨)

八月十四日(雨)

八月十五日(雨) テント撤収出発(八三〇) — 高松ルンゼ

下りきる(九五〇) — 明神池養魚場(一二〇〇) — 一三二五)

— 河童橋(一三三〇)

○ 千丈沢より輪田川へ(八月十五日) — 十九日)

又保光輩、即井、

八月十五日(小雨) 大町(九、〇〇) — 葛(一、〇〇〇) — 湖

(一、二、四〇) — 東沢(一、三、五〇) — コシノ沢(一、五、一〇) —

湯候(一、六〇〇) — 宮田小舎(一、七、三〇)

八月十六日(風雨) 小舎(六、〇〇) — 小次郎沢(七、〇〇)

— 西鎌稜線(一、二、一〇) — 有小舎(一、三、三〇)

八月十七日(風雨) 停滯

八月十八日(風雨) 小舎(七、三〇) — 槍嶺上往復 — 小舎

(八、一〇) 有小舎(八、一〇) — 滝谷出合(一〇、四五) —

滝谷偵察 — 出合落(一、二、四五) — 台出沢(一、三、三〇) —

柳谷(一、四、一〇) — 小鍋谷(一、五、〇〇) — 槍見温泉(一、六、

五〇)

八月十九日(小雨) 温泉(六、〇〇) — 柄尾(七、四五) — 九、〇〇)

— 平湯(一〇、二〇) — 高山(一、三、三〇)

計画は天文沢より北鎌尾根をねらったのであるが、予期せ

ざる悪天候のため千丈沢にルートをとった。宮田小舎は期

待に反し無人の全くの掘立小屋で、寝具もななくビバーク同

然の一夜を明かした。

〇道場(八月十二日、十三日) 土屋、水村

〇大峰山脈(十月十日、十月十三日) 南本、他三人

十月十日(快晴) 川合(一、二、四五) — 弥山川出合(一、三、二五)

— 弥山川第一の滝より半キロ先よりバツク — 弥山川出

合 — 新川出発所(一、六、四五)

十月十一日(快晴) 宿治池(六、三〇) — 行春還峠(八、四五)

— 弥山(一、三、〇〇)

十月十二日(晴後曇) 弥山(七、四五) — 佛生岳(一、二、三〇)

— 弥山(一、五、二〇)

十月十三日(晴) 弥山(七、三〇) — 猿平(七、五〇) — 双門

、滝(一、〇、〇〇) — 弥山川出合(一、五、〇〇) — 川合(一、五、

四五)

〇穂高 — 冬山偵察秋山合宿 —

目的①西穂 — 眞穂 — 前穂 — 明神最南峰間の稜線、出表

礼は更に北穂までの偵察

②上高地へ荷上げ

メンバー — 川島、尾藤、立花、井上、三枝、大島OB

十一月一日 一、二、三〇 大隈宛

十一月二日(曇) 上高地迄、米、テント、ガイル、ワカン、等装備を荷上げする。更に岳川森林帯のテント場にキャンプ

(一六〇〇)

十一月三日(晴)

A、尾藤、立花

ベースキャンプ(ハ三〇〇)ー水沼沢(一〇〇〇)ー一〇二〇

ー天狗コル(一三〇〇)ー向岳(一四〇〇)ー西穂(一六〇〇)ー西穂小屋(一七〇〇)ーテント(三〇〇)

新雪は岩陰に突々と見られるばかりで、まだ十月の様な秋山

アイゼンまで用意して来た秋々の十一月の山に対する考へも少

しは夜へて行かぬは存ない様だ。雪の全然残っていない天狗

沢は全くいやな所だ。西穂の稜線を歩き乍らこれは冬は仲々容

易くないと思つた。更にこちらから明神及び取附の前明神沢を

偵察する。西穂小屋に到着した時、丁度小屋を了る所で、主人

からねんころにもてなされ、感激して暗くなつた道を上高地へ

下つた。

B、川島、三枝、井上、大島OB

前穂任俊

十一月四日(晴)

A、尾藤、立花

テント(ハ〇〇〇)ー前穂頂上(一三三〇)ー明神三峰(一四〇〇)ー最南峰(一六三〇)ー岳沢(一八〇〇)ーテント(一八三〇)

明神側の稜線で向躰になるのは三峰岩峯の北側トラバースで

あらう。四十米のガイルの固定あれば充分。

最南峰登路として、雪崩の向躰は雪が少いと思はれるので余

り大した争はないだらう。沢に水がある争から、又登路全体と

しても特に悪物はない。下から一気に肩の部までテントを進め

るに適してゐると思はれる。

又明神の稜線は岩と雪に余り慣れてゐない阪大には、これか

らやるに適してゐるのではないかと思はれる。

希望の裏又の池、ヒョウタン池を見た。明神稜線の上部は物

凄いな所だ。

B、川島、大島OB

天狗ー真穂ー前穂ーテント

C、井上、三枝

明神池

十一月五日(曇時々雨)

上高地へテント下げ大崎、立花、井上帰阪す。

川島、尾藤、三枝、横尾岩小屋に入る。

十一月六日(晴後雪)

岩小屋(六三〇)―酒沢小舎(八四〇)―北穂小舎

(一〇、三〇〇)―酒沢岳(二、三〇)―北穂小舎(

一三、三〇〇)―北穂高次をへて岩小舎(一五三〇)

一六、〇〇)―木村氏宅(一九〇〇)

稜線では猛烈に吹きつけられた。酒沢岳の下降にアイゼンなく、仕方なく三枝一人酒沢岳北穂のコルから先に帰らしめ、二名で北穂小舎に入る。お互に冬の争を考へながら。

下山は猛烈をきはめた。八日迄に帰宅せねばならぬ私が出表れば中の湯まで下つておきたかつたが。

十一月七日(晴)

木村氏宅(六三〇)―沢渡(八九〇)―帰阪

(尾藤記)

○比良山行(十一月七日) 椎木、岡本

○穂高(十一月十四日―二十二日)

坪井、由島OB

十四日 大坂路(一七、三〇)

十五日(晴) 松本(四〇〇)―島々(七三〇)―上高地(二、三〇)

十六日(雨) 上高地(七三〇)―明神鏡前(八三〇)―徳次

(一〇、〇〇)―横尾(二、三〇)

十七日(晴後曇) 横尾(八三〇)―本沢橋(九〇〇)―酒沢ホー

デン(二、三〇)―酒沢小舎(一五三〇)

一通河前の山本、広橋の報告と横拍一夜、北尾根の腹で膝酒沢ホーデンからは足の付根迄のラツセルに苦しむ大いに消耗する。

十八日(晴後曇) 小舎(八〇〇)―ガイテングラード取附(二〇、

〇〇)―穂高小舎(二、三〇)―北穂高次(二、三〇)―北穂高次(二、三〇)―穂

高小舎(二、三〇)―小舎(一五、三〇)

ガイテングラードもラツセルが甚しい。奥穂稜線は取巻く粉雪を叩きつけられて気勢を挫かれる。

十九日(雪後曇) 酒沢小舎(一〇、〇〇)―横尾(五、〇〇)

二十日(晴後曇) 横尾(一〇、〇〇)―上高地(一六、〇〇)

二十一日(晴) 上高地(七、〇〇)―前明神沢(八、三〇)―尾根筋

(六、四五)―最南峰頂上(一、三〇)―昼食(二、三〇)―上

―ルンゼを誤り時間をくふ―前明神沢出合(一六、三〇)―上

高地(一八三〇)

登りはルートを通り尾根筋へ早く出過ぎで急斜面のナツシユに苦労する。前明神沢經由最南峰への最良ルートは可成登った地奥より入るルンゼを利用する。特徴としては両側がブッシュで真中が切拓きの様に通つてゐる。それを登つて意を正面にして南けた所で右手ルンゼに移れば尾根筋へ簡単に出来る。

尚最南峰直下には平な所があり充分天幕の二、三つ張れるだらう。

三十二日(小雪後曇)上高地(二〇〇〇)ー沢渡(二四〇〇)下山

(田島記)

〇冬山合宿(一二月二日) (一九五四年) 一月一日

本文記 等 参照

〇上高地、奥穂高(一月)

霧沢、大西

〇本曹駒が法(一二月三十一日ー一月三日) 椎木、村本

七月三日(晴)上松ー清一郎氏宅ー敬神小屋

一月一日(快晴)宿治地(九、二〇)ー五合目小屋(三、三〇)

二日(晴後小雪)宿治地(六、三五)ー遠見嶽(八、五〇) 積

雪入。程ー前岳(二〇、二〇)ー王の滝(積雪ニ米)ー遠

見場(三、二五)ー五合目小屋(一四、四〇)

三日(晴)宿治地(二、三〇)ー敬神小屋(一三、〇〇)ー清

一郎氏宅(一五、三〇)

〇洛西地蔵山スギー(三月九日) 久保OB

〇黒部偵察(失敗)

川島、山本光、土屋、久保OB 田島OB

三月十六日 大坂路(二、三、一〇)

十七日(晴)松本(一三、〇〇)ー大町(一三、三〇)ー大出(一六、

〇〇)ー黒沢宮林著小舎(一八、三〇)

十八日(晴)小舎(八、三〇)ー白沢出合(九、〇〇)ー扇沢出合(

二三、〇〇)ー新越尾根末嶺デボ(一四、〇〇)ー一四、三〇)ー

大沢小舎(一五、三〇)

所によつて積雪の多少はあつたが、白沢、扇沢で流れが雪の下に凍つていたのは好都合だつた。鳴沢出合附近は冬に大さなデボリが出てその上に雪が積つたらしく快適な広い斜面を形成してゐた。

十九日(高曇)小舎(九、〇〇)ーデボ(九、五〇)ー昼食

(二四、五〇)ー稜線(一六、〇〇)ー岩小屋沢岳ピーク

(一六、三〇)ー山本、久保OB大沢小舎に下るーテント(一八、二〇)

調子悪く新越尾根の登りに時向をくつ。

若小屋沢岳支脈は予想通り可成りのラッセルだ。上部では東方に雪庇なども発達してあるが、中も可成りない。下ると南もなかくカンパネ針葉樹の交る森林帯になるが、木は専ら西斜面に生え尾根筋はあいている。テントは一下りして、ここから尾根がしばらく傾斜を失つて続く所の一寸したコル状の地帯に林を取上にして建設する。

二十日(雪)川島、土屋、テント(三、三〇)―三角峠より少し西方へ下つた奥(一三、三〇)―テント(一三、三〇)

調子の悪い田尻を残し偵察にいくも境界悪く果さず。しかし粉雪舞ふ。ちみちの木の林に兎が飛び出した。Thunder band をとまよつてゐる様。

三十一日(雪)停滞、食糧の窮迫を発見。

三十二日(晴)テント(一〇、〇〇)―昼食(二三、三〇)―三三、〇〇)

稜線(三三、三〇)―新越尾根ジマングション(四〇、〇〇)―麓川谷(

二六、〇〇)―大沢小舎(二七、三〇)

折角晴れたのに一寸した手違ひによる食糧不足から撤収せねばならぬことは甚だ残念。しかし天気は飽迄よく且暖い。雪や立山のすばらしい姿、お伽の囀の様な内蔵ノ助平も手に取る様

に見える。しかし別山沢には雪崩の音が絶えない。大沢小舎で久保〇日、山本も連日の降雪に空しく下山したことを知る。

二十三日(晴)田島、土屋、小舎(二二、〇〇)―瀬沢(二二、三〇)

―白沢(二二、三〇)―寄沢(一四、〇〇)―大出(一六、〇〇)

午前中新越沢でスキーを樂しむ午後下る。

結局何も出来ず至極残念。

二十四日(曇)川島 小舎(二〇、〇〇)―大町(二六、〇〇)

B隊春山△△宿報告

(本文、春の恵部への地図、偵察状況を参照)

尾蔵(一)突戸、玄橋、山本達、西川、三枝、岩水

三月二七日 大沢出発

二十八日(曇後雨) 住吉部合悪く不参加となり、計画を縮小

して本合宿の主目標を小規模な恵部偵察に変更する。

大町出発(二時)大出(三時半)雨の中を入り、黒沢出合

少し下手の河原の無入小舎に入った。(一五時半)

二十九日(雪) 小舎を入時半出発。麓川も霧沢本合を過ぎる

と風雪となり、先頭が大沢小舎に入ったのは四時なるも、

最後尾は八時半だった。風雪の中では、殊に好ましくない

ことであつた。本日兵隊単身で大町より我々に追付く。

三〇日(快晴) 立橋、西川を小舎に置いて他は新越尾根肩迄荷上げ。

三一日(高曇) 偵察隊(尾藤、兵衛、山本)がポート(立橋、西川)ハウスマーバー(三枝、岩永)大沢小舎九時半出発。岩小屋沢岳南肩ピーク(二四時)で甘ポートは分れ、偵察隊は中尾根下降、高曇約一八五。米皿の所にACを設け

た。(一六時)

四日(晴)

○偵察隊 九時半三名にてAC出発、雪渓を下り途中の小滝で時間を要し、二股一一時半に着く。新越沢下降皿曲部に一時半到着。左岸のトラバースを試みるが不能と断じ一五時引返す。AC一八時に帰る。

○大沢パーティー 立橋、西川、岩永、三枝

岩小屋沢岳に登る。

小舎発(八五〇)新越乗越(二五五〇)三〇〇一岩小屋沢岳(二五〇〇)一五三〇(乗越)一六三〇(小屋)一八二〇

二日(ガス後晴)

○偵察隊 休養

○大沢パーティー 休養、スキー練習

三日(晴)

○偵察隊 尾藤、兵衛の二名にて下降

AC八時出発、二股八時半、皿曲部巻上に九時半到着す。其処より雪渓を急登して岩小屋沢岳支脈末端に立つ。当尾根をドーム迄上下して黒部を偵察す。(偵察状況略図は本文参照の事)ACに午后五時帰幕す。

○大沢パーティー

小屋発(四五〇)途中ワカンをアイゼンに変え、針金峠着(七五〇)八五〇。小屋は尾根が通っており、入口が閉じて中は天井迄雪が一杯つまつてゐる。雪をかき出して四人入った。小屋発(八五〇)連華岳頂上(一〇、三〇)一風強い為直ちに引返す。小屋帰着(二、四〇)一三、〇〇)

三枝破一入残して三人で針ノ木岳に向ふ。アンガイレン尾根はフワフワの粉雪が全然雪死も作らずに鋭い刃状にあり、アイゼンは紐子になり、ピッケルはきかず、慎重に歩くと尾根の右手をとつて進んだ。以外に時間が掛り針ノ木頂上(一五、三〇)一五、四〇。帰途はトラバースして小屋へ

一六三(三)着、大沢小屋(二二〇)

四日(晴)AC撤収、一三時半出発、一七時半大沢小屋に帰り

又芳振りに全員顔を含して、行った山の話に夜おそく遊花

を味かせる。

五日(高曇)大沢谷宿を終了して引上げた。

大沢(九三〇)黒沢(一二〇〇)大出(四〇〇)大町(二六〇)

大町迄歩かねばならなかつた。

春山△口宿後記

偵察隊を反省して、滝のある事の分つてゐた新越沢下降は、第

一步からして間違つて居り、岩小屋沢岳支脈で黒部に近づく所

期の構態からは、当然岩尾根を下降すべきであつた事、又ACの

位置及び高度が高さに過ぎ、あの様な場所、状態の所で黒部に

到らうとするならば、出来る限りACを黒部に近付けねばならな

い事、又偵察行動の如何により移動し得るACならしめる為、岩

小屋沢岳支脈を下降すべきであつた事等が特に強く反省せられ

る。とも角ACを出るだけ(黒部に到る所要時間からのみ考ふ

べきではない)黒部に近付ける事は、必須の事と思ふ。

鳴沢右岸に黒部から上つてくる夏道の事を春山以後に正解に

知つたといふ不勉強さは鳴沢谷からの尾根を下らなかつたといふ大きな失敗をしてつた。根本的な面に於ける危機には誠に面目ない次第である。

又大沢バーテイに残つた春山初めの人達には、春山としてのトレイニング特に高尾雪中天幕、雪洞生活を行へなかつた事は残念であるが、好天に恵まれて春山を可成歩き、味はへた事は幸運であつた。しかしこの好天の春山を以て、春山を認じて了はない様特に留意されん事を切に望んで止まない。(尾藤記)

○白馬岳(三月二日)三月二日(三月二日)南本也一人

三月二日(小雪後風雪)四ッ谷(八四〇)―二股(二二三)―途

中からスミ―中山沢出合(二六〇〇)―猿倉平ビ―バツグ

(二八二五)

二二日(晴)―ビ―バツグ地(二八〇〇)―猿倉小屋(八二二)―

ビ―バツグ地―猿倉―B地(二〇〇〇)―白馬尾(二二四五)―

猿倉(二二三五)

二三日(快晴)―猿倉(七四〇)―白馬尾(九二五)―スミ―デ

ッポ(二三〇五)―村宮小屋(二五五)―D地(二六二〇)―

猿倉(二八二〇)

極小規模な表層雪崩が白馬側からひんげんに起つていたが

三合目、杓子側は無事であった。

○大峯山（四月四日～四月五日） 南本他一人

○四日（晴後曇）上ノ多古（三三〇）→祖母谷ノツメ（五二〇）→山

上（二六三〇）

五日（小雨）山上（二、四五）→吉野口（二、八二〇）

○八方唐松（四月二日～四月四日） 久保〇日他

○木曾駒岳（五月） 宮本〇日他

○大峯山（五月） 東、近、辻川 他

○愛知川、雨乞（五月一日～五月三日） 久保〇日他

○六甲保壁（五月三日） 山本、南本

○惣合谷（五月二三日） 木村、他

○六甲、大月谷（五月三〇日）

奥戸、玄橋、木村、椎木、辻川、高木多

○大月谷・保壁（六月六日）

玄橋、山本、尾藤、外三名

○ロツクガーデン（六月一三日）

木村 他三名

六月五日

○エベレスト登頂並びにヒマラヤについて

○夏山剣合宿に決る。

六月一日、リーダー会

○総会打合せ。ナイロシテント購入についての寄附金対策、眞

砂天合宿について具体的な検討。○冬山西穂、北穂に目、決

定。

六月二日、第五回総会

○会長挨拶。○二七年報告（尾藤）○装備報告（坪井）○会計報

告（大村）○二八年役員決定（会長篠田先生、リーダー川島、尾

藤、山本、坪井、住吉、東、幹事處永（医）加藤（理）松本（工

田壽（法至） 映画内西登山行会提供。

六月二五日

○五一年エベレスト隊の偵察結果（尾藤）

○夏山計画（剣西面、下願下）（川島）

六月二日

○夏山計画検討

七重九団

○ナンガバルバット征服に附して ○夏山計画検討
七月一日

○夏山準備会 ○概説(大島、山本)
七月一日

○夏山準備会
八月六日

○夏山中間報告会
八月三日

○北嶽より西嶽縦走計画発表(坪井)
八月二日

○夏山報告会

○都合符(川島) ○鈎、穂高縦走(東) ○内蔵之助平・惠部・
南沢・槍ヶ(川島) 奥又台(山本) ○千丈沢より蒲田川右候(

坪井) ○鈎山(鳴海) 濁沢(藤田先生)
八月二七日

○冬山、春山討議、○寄附金集めについて
九月三日

九月一七日

○幻燈会 ○冬山計画
十月一日

○春の北嶽並びに槍・蒲田川右候(実戸) 慶応会報より(大島)
十月二日

○立教報報々より(水村)
十月二九日

○各大学山岳部の冬山計画(川島、尾藤、大島) 秋山計画打合
せ(尾藤、川島)
十一月五日

○秋山計画第二次(山本)
十一月二日

○秋山報告(川島、山本) ○冬山計画概要発表(川島)
十一月九日

○滝谷第二尾根(本中) 岳川より滝谷(川島) ○冬山計画討
議

十一月二六日

○秋山第三次報告(田島) 冬の装備について論議 ○冬山計画
討議

十二月三日

○穂高周辺における極地法

○冬山計画討議

一月一日

○冬山計画 装備(本中) 会計(土屋)

○ラジウスによるパン焼き装置(川崎) 東京各大学の消息(大)

島)

一月二二日

○食料計画(実戸)

○トースター試用(山本) 装備計画(本中)

一月一七日

○テントの話 ○冬山計画討議 ○メンバー決定

一月二四日

○冬山最終準備会

一九五四年一月一四日

○冬山報告会(行動概略・川崎) 装備報告(本中) 食糧報告

実戸、会計報告・土屋 寄附金に関する報告(尾藤)

一月二一日

○春山計画

○穂高行報告(大西)

一月二八日

○冬山反省会(装備、技術、天候)

○大峯山行報告(花)

二月四日

○「步入」に出す冬山報告について検討

○伊吹山スキー行計画(住吉)

二月二五日

○春山計画討議

三月四日

○大月谷岩登り計画

三月一日

○第二回春山討議(黒部横断について具体案)

三月一三日

○春山計画討議並びに債票隊の準備会

三月一八日

○春山計画

三月一九日

○春山計画

○新入募集

三月二十五日

○春山計画

○偵察隊報告

◎一九五四年度

四月一日

○春山報告会

四月二日

○五月山行計画発表

○本年度役員決定(リーダー決定)

四月二日 リーダー会

○事務分掌を決定

○本年度の方針について

四月二十九日

○私鉄ストのちめ流会

五月四日

○本年度山行についての検討

五月一日

○五月山行報告(木曾駒・空巾・大峯・近)

○最近の登山界の状態について

五月二日

○関西学連総会報告(尾藤)

五月二日 リーダー会

○夏山計画討議

五月二七日

○阪大山岳会のア史(尾藤)

五月二十九日 ○B総会(於大阪工業クラブ)

○昨年度の活動状況(尾藤)

○今年度の計画(空巾)

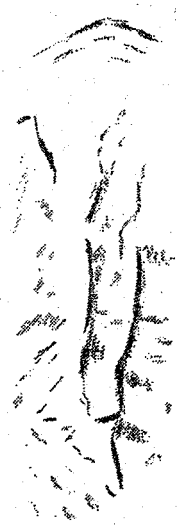
○感想(先生、水野先輩)

出席者

藤田先生、水野、遠藤、新保、徳永、家田、松久、大島

久保、伊藤、西宮、山本、佐吉、池、宮本、近 各先輩

尾藤、木村、空巾



編集後記

◇時報もとうとうⅡ号になった。くにはとへればそろそろ小学
校と云つた頃である。Ⅰ号から振りかへつてみると、後立の
ラッシニに始まつた我々の山行も本号で遂に冬の稜高のポー
ラー迄発展して来た。あの徳永、大島等会創生期の人々の次
の世代の総決算として冬山はとくに意義深いものがある。

◇今回は冬山と関連して藤原元に標高を中心として極地迄のス
ピード等に關して研究を発表していただいた。二ういった方
面を余り論じたものがなかつただけに非常に参考になるので
はなしかと思ふ。

◇ナイロンテントに關しては北海道の川崎との連絡がうまくゆ
かず、在阪の者のみでまとめたため云ひ足りぬ案が多々ある
と思ふが、悉しからず御詠承願ひます。

◇会費名簿は今回より各方面の要望もあり前年の先輩の方々も
全部掲載しました。記載もれ、住所等変更、間違ひがあまりま

じら至急会へ御連絡下さい。

◇毎号のことではあるが、御多忙中御寄稿下さつた篠田先生、
色々御忠告下さつた先輩諸兄に深く感謝します。



昭和二十九年六月

大阪大学山岳会「時報」 第四号

発行所

大阪市北区常安町
大阪大学学生部内

大阪大学山岳会

編集責任者

坪井圭之助

印刷所

大阪市西区江戸堀北通二丁目

美研社

電話 土佐通 (42) 五〇〇八番

会 員 名 簿

1954. 6. 現在

会長	藤田 肇治	大阪市都島区深野田9丁目大阪大工学部内 豊中市家田97	精進工学科教授
先輩	和田 肇 禮 (医明32)	在イラン	
	小浜 基 次 (医昭3)	大阪市阿倍野区玉手町三南校職員寮	阪大第一解剖教授
	水野 祥太郎 (医5)	阿倍野区大阪市五医大病院内	市大整形外科教授
	国 野 勇 吉 (医)	茨木市中之町	前業
	小林 義 郎 (医 9)	豊中市服部鉄筋アパート内	豊中市市民病院長
	坂谷 信 次 (医 14)	兵庫県加前郡船形村	前業
	河原 信 三 (医 14)	神戸市東灘区住吉駅前(北側)	
	新谷 玉 郎 (医 14)	豊中市東田1/123	阪大第三解剖
	小沢 淳 二 (医 14)		兼佐野病院長
	酒井 英 之 (医 15)	豊中市本通3丁目5	日本生命査査課
	龍 一 郎 (医 16)	布施市中小坂591	阪大第一病理講師
	岡 崎 晃 (医 16)		此田病院外科医長
	慮 矩 裕 (医 18)	西宮市今津水濱町17(浪米中)	阪大整形外科
	友田 洋 一 (医 22)	大阪府北河内郡慶屋川町平地	渡信病院耳鼻喉科
	大久保 克 己 (医 23)	興塚市堀191	帝國産業厚生病院外科
	伊藤 俊 夫 (医 23)	尼崎市南明町1/13(尼崎373)	阪大産婦人科
	山 林 一 (医 24)	大阪府西区新町通11丁目46	阪大第三内科
	渡 辺 修 治 (医 25)	大阪府豊能郡箕面町平尾730	阪大第二外科
	吉川 定 範 (医 25)	行徳市長田	阪大第二外科
	小川 弥 栄 (医 25)	大阪市都島区毛島町154	
	徳 久 篤 司 (医 26)	大阪市東淀川区十三東之町	大手前病院外科
	松 永 博 (医 26)	大阪市南区桃谷町15	阪大第一内科
	塚 田 千 壽 (医 28)	伊丹市伊丹357 弓場医院内 (伊丹 22)	阪大産婦人科
	住 吉 山 也 (医 29)	西宮市羽衣町97(西宮316)	インターン
	永 野 健 次郎 (理化11)	芦屋市三茶町63	美津濃 副社長
	山 口 省太郎 (理物13)	芦屋市三茶町92	阪大物理化学研助教授
	関 崇 三 (理化13)	芦屋市月若町73	阪大理学部仁田研助教授
	国 村 雄二郎 (理物15)	芦屋市三茶町23	阪大理学部伊藤研
	新 保 正 樹 (理化15)	西宮市甲東園天神下15	美津濃技術研究所
	赤 松 二 郎 (理化16)	西宮市仁川町1077	醸造科学研究所

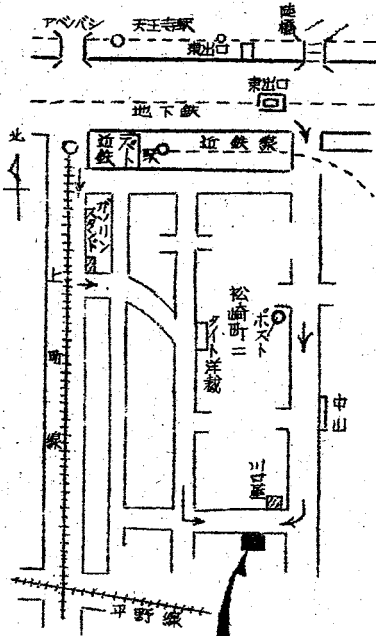
塩野 夜之助 (理化 20)	神戸市東灘区住吉町新堂 45 (療英中)	阪大理学部
高倉 達雄 (物理 21)	神戸市垂水区西垂水町 184	阪大理学部海研研
塩野 喜久夫 (理化 23)	神戸市東灘区住吉町新堂 43 (御影 2269)	
棚山 俊樹 (理化 23)	尼崎市瀬江住宅 401	大阪ガス中央研究所
大島 輝夫 (理数 24)	神戸市東灘区御影町西平野 15 (御影 3808)	住友化学 K.K. 研究課
加藤 幹太 (理生 27)	大阪府豊都美面町桜井 (桜井 258)	阪大理学部本城研
細見 一仁 (理生 28)	大阪府福島区上福島南 2丁目 (福島 6408)	阪大理学部大学院
跡谷 弘 (理化 28)	大阪府西成区玉出本通 1の10	
藤村 一生 (理物 29)	豊中市西町筋 5丁目 32 (豊中 3090)	阪大理学部大学院 (浸田研)
川戸 俊治 (工機 5)	豊中市新愛 622 (豊中 3178)	K.K. 大阪木イラー製作所
山口 次郎 (工機 5)		阪大工学部電気科教授
仙波 正 (工船 7)	政牟利加納朝日町 5丁目	仙波能率事務所
武田 正孝 (工機 8)	京都市伏見区深草飯倉田町府管住宅 116	東通機工 K.K.
村上 龍郎 (工機 8)	堺市北久穂町東 1丁目 25 (塚 904)	明光機機製作所代表者
高富 幸男 (工化 8)	姫路市網干区新在家 940	日セノ網干工場
香藤 俊真 (工治 9)	尼崎市新田園和 1031	大阪鍛造 K.K.
池田 滋 (工治 10)		日立製作所機造部
榎原 信男 (工電 11)	京都府乙訓郡長瀬町南田下町 (補正 116)	日本郵船大阪支店工務課長
吉見 俊一 (工船 11)		
河原 日章 (工機 12)		いすゞ自動車 K.K. 川崎工場
池宮 清一郎 (工船 12)	西宮市高木石沢町 33 西灘荘	
田村 稔道 (工化 12)	大阪府東淀川区三國町 1223 (三國 549)	田村香料 K.K.
薫川 誠一 (工機 13)		福井機機 K.K.
坂上 秀夫 (工機 13)	芦屋市大槻町 784 (芦屋 4326)	明和産業
遠藤 常忠 (工電 13)	大阪府阿倍野区山坂町之町 312	関西電力近畿支店工務部業務課
大沢 信一 (工船 13)	東京都杉並区車田町 20150	新匠学 編纂課
福田 正治 (工化 13)	京都市左京区粟田口鳥居町 47 (吉田 3216)	日本紙張工業 K.K.
吉田 運三 (工化 14)	芦屋市打出小道 (芦屋 4518)	荒川林産化学工業 K.K.
川村 宏 (工機 15)	豊中市内田 250 (豊中 563)	汎産製作所
玉歩 一純 (工機 15)	西宮市滝尾町平町 48	京阪神運行車輛部第一技術課技術係長
市瀬 清美 (工電 15)		東芝 K.K. 検査技術課
盛岡 英治郎 (工機 16)		福新市労働基準監督所
池田 素雄 (工治 16)		門司市国鉄監理局機械課長

野崎 馨 藏 (工治 16)	東京都杉並区成家 30404	
砂越 竹 夫 (工化 16)		山口県岩口市藤原石畑K.K 製油課長
興村 正 巳 (工化 16)	兵庫県加古郡加古川町清之 1220375	神戸工機大久保工場
佐野 利 正 (工電 16)	大阪府阿倍野区晴明通1の79 (天下茶屋5776)	大阪中央放送局環放送所
大島 直 義 (工船 16)	愛知県市川町 大島重義炭村	
菅 弘 (工化 17)	布旭市長望3丁目22	乾貴金属化工K.K
京 極 与寿郎 (工化 17)	大阪府東住吉区田辺東之町6017	阪大工学部応化助教
松本 裕太郎 (工化 17)		助手
青木 静 男 (工化 18)	東京都品川区大井町東町1282	保安隊総監部補給課
前 三 大 郎 (工糖 19)	神戸市長田区尻池町607313	川崎興鉄計量器工場
村田 良二郎 (工電 20)		
田中 行 雄 (工構 21)	大阪府履屋川市宇智堂 千歳荘	大阪大理工学部材料
久保 三 朗 (工機 22)	大阪府南区北桃谷町18(第791)	住友金属工業K.K
四宮 誠 裕 (工船 28)	大阪府阿倍野区相生通3丁目15 (天下茶屋2958)	
川島 勇 (工機 29)	北海道空知郡赤平町 住友赤平製炭寮	住友石炭K.K
宮本 真 雄 (工通 29)	尾崎市武庫之荘4丁目30	早川電機K.K
近 璋 三 (工構 29)	大阪府阿倍野区天王寺町2628	阪大工学部大学院
二本 節 夫 (工通 29)	尾崎市江ヶヶ寺	川崎飛行機減速機製作所
田藤 沢 (経 28)	芦屋市宮川町13 (芦屋2210)	住友金属K.K 吹田製造所
山本 光 二 (法 29)	芦屋市大原町95 (芦屋3629)	大和銀行三宮支店
土屋 直 (経 29)	芦屋市瀬町57 (芦屋3648)	住友金属K.K 和歌山製造所
堀 志 男 (派 29)	大阪府港区大宮西之町1丁目41	田辺製菓
櫻 昭 二	大阪府茨北郡福太村聖ヶ崎	医学部 4年 (6)
東 雅	大阪府阿倍野区阪南町中6丁目16	" 4年 (6)
小沢 逞 夫	芦屋市三茶屋87 (芦屋4547)	" 4年 (6)
岩 永 剛	宝塚市武庫山14	" 4年 (6)
坪井 圭之助	布旭市稲田1614 (布旭2119)	" 3年 (5)
林 伸 一	神戸市灘区森後町102	" 3年 (5)
兴 户 元	尾崎市塚口竹町1丁目1194	" 2年 (4)
田 村 智英子	吹田市豊水24703	" 2年 (4)
三 枝 礼 子	西宮市鳴尾町砂浜新田38 (西宮1070)	薬学 4年
井上 一 枝	神戸市東灘区御影町一里塚1093	" 4年
由比 彦 也	西宮市分厚町六石町1845	経済学部 4年
玄 橋 茂	西宮市末広町5	" 4年

水村谷	大阪市城东区放出町253	経済学部	3年
大西勝	枚方市阪大工学部内 学生寮	工学部 (燃焼)	4年
鷺沢忍	枚方市阪大工学部内 学生寮	" (造船)	3年
立花直治	神戸市生田区中山寺通7丁目8	" (機械)	3年
嶋邊淑雄	芦屋市打出窓4女町53	" (精密工学)	3年
山本進二郎	大阪府豊能郡箕面町箕面73	" (冶金)	3年
南本靖治	和歌山市西浜町260	理学部 (物理)	3年
西川元夫	大阪市東淀川区下新庄町2の151	" ()	3年
辻川		工学部 (北校)	2年
樺木二郎	堺市柳之町3丁目22		
本年度新入部	京都市東山区清水町3丁目340	インターン	
石橋俊之	大阪市都島区四木町1の3 国野医院内	理学部 ()	3年
瀧原尊	堺市上之芝町4丁目528	" (化学)	3年
高木俊夫	大阪府中河内郡倉室町 鴻池新田寮	" (北校)	2年
内藤統玄	大阪市東住吉区平野浜町3011	医学部 (南校)	1年
佐谷谷稔	大阪市浪部野区阪南町西3059	法学部 ()	1年
西三司大	枚方市番屋ヶ丘	" ()	1年
面越清	吹田市千里山189	経済学部 (北校)	1年
伊藤博司		" "	1年
戸井祥夫		工学部 "	2年
村瀬弘	西室市松瀬荘213	" "	1年
石沢命久	豊中市豊中駅前通4	歯学部	2年 (4)

大正九年より伝統のある

吉田屋の
山靴
スキー靴



吉田屋株式会社

大阪市阿倍野区松崎町二丁目三八番地

電話 天王寺(77) 九五四一番

都心にある山川屋 山へ行く人々の相談所 北口山岳スキー研究所

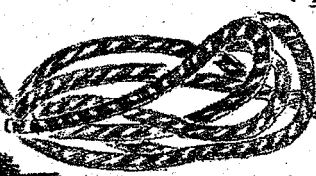


ま、とにかくい
らしてみて下さ
い。
そういふ香なん
で。うちは親身な
つてといふのがモ
ット。御満足得
られるでせうキ
ット。

大阪市北区絹笠町十一

(堂の裏・回生病院北側)

電話堀川 3240



SPORT HAUS

山とスキー用品専門卸

登山・スキー用具は

岳人好評の JODER・ENJOY マーク製品を!!

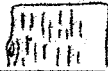
株式
会社

ヨネ商会

大阪市北区茶屋町三三番地

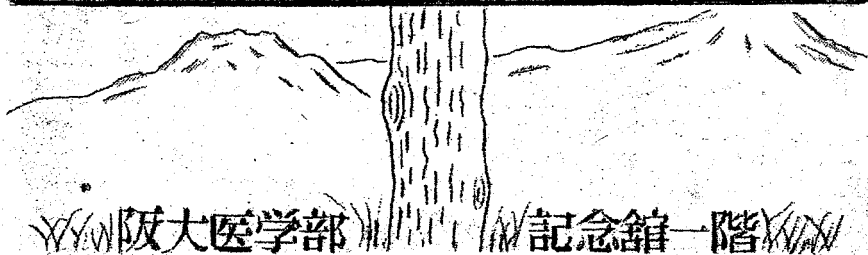
(但し北野劇場省線ガードより北
へ三筋目右へ突き当り右側)

電話豊崎(37) 7810-0677



安くて・美味しい

医学部食堂



大阪大学医学部

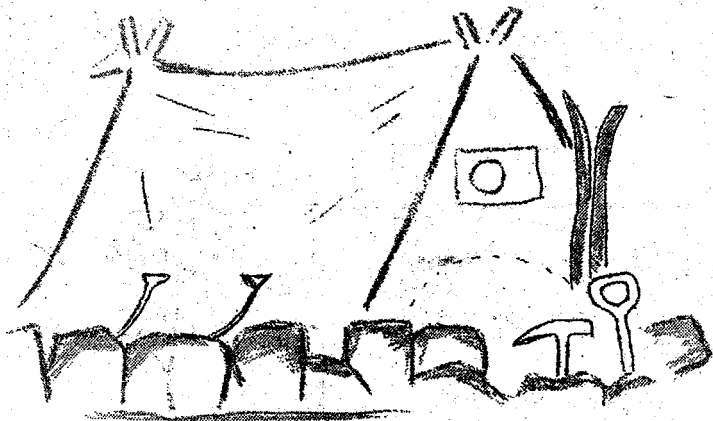
記念館一階

山の店

軽登山靴 入荷

キマラバンシューズ
(ビグラム底)

¥1,950.00



登山用具とスキーの店

大阪店 大阪市北区曾根崎上2-1-7 TEL ☎ 5501

(梅田新道御初天神南側エムパイマ通り東入ル)

松本店 松本市神明町96

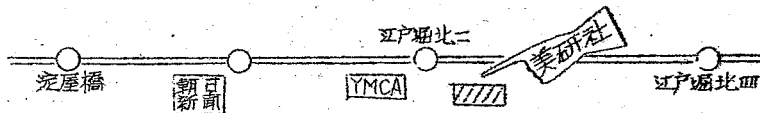
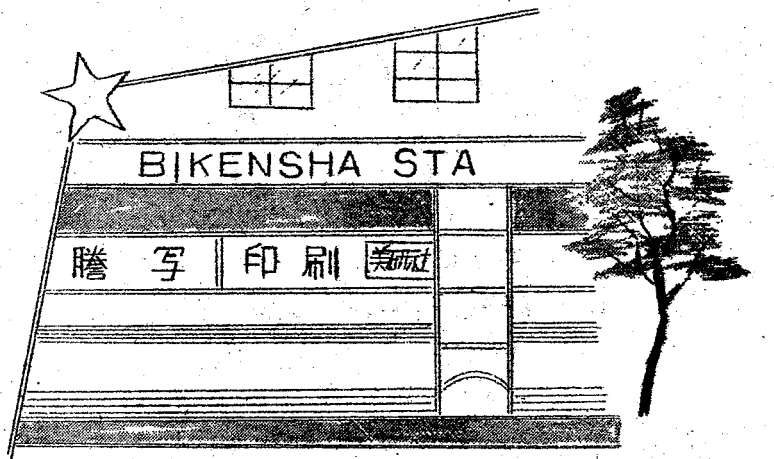
騰写印刷は

早い！ 安い！！ 美しい!!!

美研社

市電 江戸堀北通2 電停前直

電話 土佐堀 (44) 5008番



スエーデン製 プリムスパーナー
 英國製 ナイロンザイル
 オーストリア製 クリンカー
 オーストリア製 ムガー
 スイス製 トリゴニー

岳人待望の外国製品入荷



1954年型

登山、キャンプ用品
 ハイキング用品
 登山服装

豊富取揃へ

大阪 美津濃 淀屋橋

R. Saigusa.